主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2022 graph magazine vol. 60

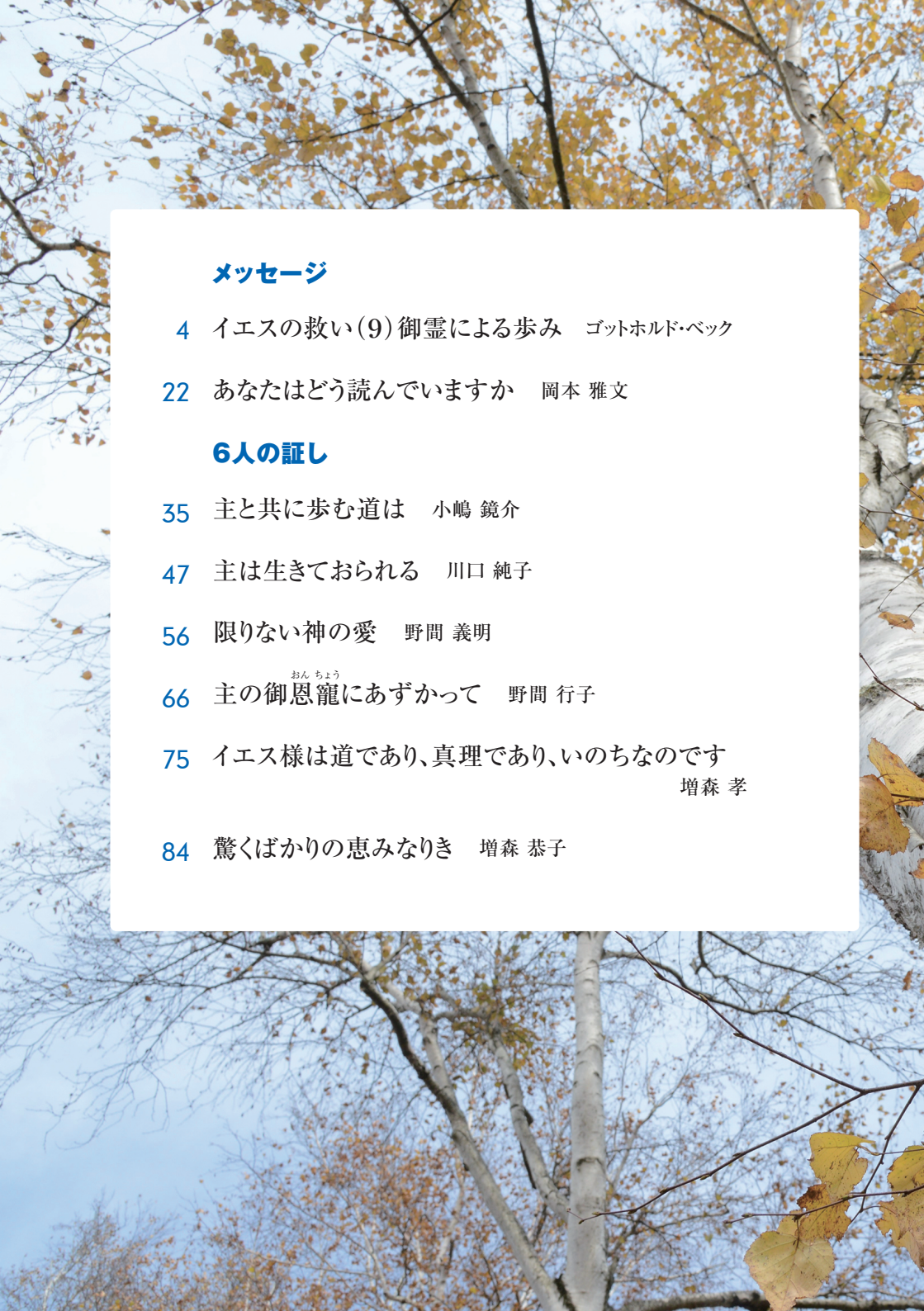
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

vol. 60 定価100円（税込み）


Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる
主は、生きておられる
Unser HERR lebt



メッセージ

4 イエスの救い（9）御霊による歩み　ゴットホルド・ベック

22 あなたはどう読んでいますか　岡本 雅文

6人の証し

35 主と共に歩む道は　小嶋 鏡介

47 主は生きておられる　川口 純子

56 限りない神の愛　野間 義明

66 主の御恩寵（おんちょう）にあずかって　野間 行子

75 イエス様は道であり、真理であり、いのちなのです　増森 孝

84 驚くばかりの恵みなりき　増森 恭子

イエスの救い（9）御霊による歩み

ゴットホルド・ベック

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。

（ガラテヤ　5・16～18）

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。（ガラテヤ　5・24、25）

今回は、キリスト者としてどうしても知っておかなければならない御霊による歩みについてともに学びたいと思います。

信者の歩み方を見ると二つあります。一つは「肉」による歩み、もう一つは「御霊」による歩みです。イエス・キリストを自分の救い主として受け入れればそれで十分だ、と考えているキリスト者がたくさんいますが、イエス様はそれでは十分でなく御霊様による歩みをしなければならないと教えておられます。聖書は次のように言っています。

肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

（ローマ　8・8、9）

かつてイエス様が地上におられた間、イエス様と一緒に歩んだ弟子たちは、素晴らしい主の御力を目で見、耳で聞き、体験しました。彼らはどんな困難にあっても行き詰まることがなく、欠乏することもありませんでした。病気で悩んでいる人は、共におられるイエス様の御手によってすべて癒されました。悪魔や敵対する者が向かって来ても、主イエス様の前では手も足も出ませんでした。

現代に生きる私たちキリスト者にとっても、このイエス様の力が現実のものとならなければなりません。もし主と一つになるならば、これを現実のものとすることができるのです。私たちのあらゆる問題は主によってまったく消え去り、主のみそばにはべるなら、神のご臨在による平安が心を支配し、限りない主の御力が私たちの内側を満たしてくださいます。

ある時、主イエス様は弟子たちに「わたしはやがて天に帰る。しかし、わたしの代わりにわたしはあなたがたに助け主を与える。それはあなたがたを導き、力づけるであろう。あなたがたは悲しんでいるが、わたしが天に行くことは、かえってあなたがたのために益なのだ」ということを告げられました。（ヨハネ14～16章）弟子たちはこれを聞いて驚きましたが、主が昇天された後、五旬節の日に、主が約束された御霊の降臨を受けて満たされました。弟子たちは「神の宮」、すなわち聖霊を内に宿す者となったのです。

同じように、御霊様は私たちキリスト者の内にも宿っておられます。次のみことばは、私たちにもあてはまるみことばです。

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。

（1コリント　3・16）

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（1コリント　6・19、20）

生きた真の神が私たちの内に宿っておられるのですから、私たちはこの世で一番の財産家と言わなければなりません。

ところで、今回の問題は、御霊様を宿してはいるけれど、私たちが果たして霊によって歩んでいるかどうかということです。聖書にある「御霊による歩み」を私たちはすでに自分のものとしているでしょうか。

主である神様が一番喜ばれるのは「主よ、私たちは哀れな存在です。どうか救ってください」という人間の叫びだと聖書は言っています。もし、ここまで主の御前に砕かれるなら、御霊様の歩みに入ることはそう難しいものではありません。人間の目から見ると完全に打ちのめされた哀れな状態が、主である神の目からは、その人が解放される絶好の機会なのです。

ではこれから、三つの点に分けて御霊による歩みについてご一緒に学びましょう。一つ目は「霊肉の闘い」、二つ目は「私たちのいのちであるキリスト」、最後に「御霊の法則」です。

1．霊肉の闘い

なぜ主を信じる者の間に、これほど大きな違いがあるのでしょうか。同じ御救いにあずかり、同じ御霊様を受けていながら、ある人々は霊的であり、ある人々は肉的です。

その理由は、どのキリスト者も二つの性質をもっていて、霊的なキリスト者は肉に打ち勝っており、肉的なキリスト者は肉に打ち負かされているからです。これが私たち主を信じる者の間にも見られる違いの原因なのです。

この二つの性質を持っていることを、私たちは経験によって知っています。心の内には二つの法則があって、一つは罪に引き込もうとし、もう一つは主イエス様の元に私たちを引き上げ、高めようとします。一つは古いアダムの罪の性質であり、もう一つは新しい霊的なキリストの性質です。

人間の生まれながらの性質は、罪を犯すことしかできません。それは魚が水の中でしか生きることができないのと同じです。古い性質は罪の中に溺（おぼ）れているのです。そしてこの「古い人」は神を知らず、神に従わず、神に喜ばれることができません。この古い性質は私たちキリスト者の内にも死ぬまで残っているのです。

一方、主イエス様を受け入れたことにより、私たちキリスト者の内には罪を犯すことのできない、新しい性質も与えられています。この新しい性質は、神を認め、神に従い、神に喜ばれる性質です。この新しい性質は聖霊によってのみ与えられます。

こうして信仰者の内側には生まれながらの古い罪の性質があり、同時に聖霊によって与えられたまったく新しい性質もあるため、内側で霊肉の闘いが始まるのです。多くのキリスト者は、この「霊肉の闘い」を闘って疲れ、「勝利の生活は私には不可能だ」と言って絶望してしまいます。また、ある人々は闘うことを止めて、この世を愛する者となってしまいます。パウロのように勝利の声を上げることのできる人は極めて少ないのです。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ　8・1～2）

霊肉の戦いに勝利できないのはどういうわけでしょうか。その理由は、多くのキリスト者が、肉の性質にはなのです。

イエスの救い（9）　御霊による歩み

「良いところが一つもない」という事実を深く知ることができていないからです。私たちは「罪にまみれた存在」です。魂の中核から全体、隅から隅まで完全に罪にまみれているのです。パウロも次のように言っています。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。（ローマ　7・18）

肉による歩みとは、自らの力で何かすることであり、そのように続ける限り、主イエス様の勝利を自分のものとすることはできません。主イエス様の勝利は、私たちが御霊によって歩んでいるときにはじめて、経験することができます。

御霊による歩みとは、内に住み給う御霊様に「自分は何もできません。あなたにすべてをおゆだねします」と言って、内住の主にすべてをゆだねて歩むことを言います。その時、主の偉大さを心の底から認め、主に従い、主に喜ばれる生涯を送ることができるのです。

私たちはまだ「自らの力」に頼り、肉によって歩んでいるのでしょうか。パウロの生きていた時代の多くの信者がそうでした。聖書にあります。

他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。（ピリピ　1・17）

どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。（ピリピ　3・2）

というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。（ピリピ　3・18、19）

もちろん主に仕えるには良い肉をもって仕えていることでしょう。ですが、たとえ良い肉であっても悪い肉であっても、生まれながらの「肉」である限り、主の御前には厭うべきもの、嫌われるべきもの、憎むべきものなのです。多くのキリスト者は自分では意識していないかもしれませんが、自分の力で、自分のために、自分によって、さまざまなことを行なっています。

今、主の十字架を仰いでみましょう。イエス・キリストは私たちの身代わりとなって死に、よみがえり、そして天高く父の御座の右に昇り、そこから聖い神の霊をお注ぎくださいました。それは私たちを変えて、私たちが主のために、御霊様により、御霊様を通して、すべてのことを行なうようになるため、つまり、私たちが御霊によって歩むようになるためだったのです。

イエスの救い（9）　御霊による歩み

何か事が起こると直ちに主の御前に行き、「私には何もできません。あなたは私の内におられる柔和であり、謙遜であり、愛であり、すべてです。どうかあなたがこのことに解決を与えてください」と祈るのが、御霊によって歩む人の特徴です。

私たちはすでに次のような経験はしたかも知れません。自分の生まれながらの性質を恐れて、何とかしてそこから脱け出したいと考え、主におゆだねしてすべてを任せ切ります。気がついてみると、知らずに古い性質が出ないで済んでいた…。このような経験をしていたとしても、もしそれが一時的なものなら御霊による歩みとは言えません。いつも「古い人」に打ち勝っていてはじめて、御霊様によって歩んでいると言えるのです。

御霊による歩みの中に入ると、勝利のために闘うことは終わり、勝利のうちに休むことができます。内住の主にすべてをおゆだねし、主に一切をしていただくという任せ切った生活が御霊による歩みです。出エジ

プト記からそのような個所を見ましょう。

それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」（出エジプト　14・13、14）

この時、イスラエルの民は自分で何かをなそうとはしませんでした。主が何をしてくださるか、ただ主にゆだねて見ているだけでした。

ところで、サタンは私たちキリスト者が御霊によって歩むことを妨げようと、強力に私たちの肉の性質に働きかけてきます。

過去の戦争で日本と中国が戦ったとき、日本軍は戦車を多く使いました。中国軍はこれに対し、狙撃兵を組織し、面白い戦法を考えたそうです。それは中国兵が戦車の通り道に隠れていて、日本の戦車がやって来ると、まず一発だけ鉄砲を撃ちます。すると戦車は立ち止まって、どこから弾が来るのか見極めようとします。しばらくたってまた一発撃ちます。これを繰り返しているとそのうちに、戦車の中にいる日本兵は我慢ができなくなり、弾の来る方向を見定めようとして戦車から首を出します。そこを狙って狙撃兵が日本兵を撃ち殺し、戦車を分捕るという戦法です。サタンが用いる戦法も、いつもキリスト者の「己」を外に出させようとするものです。サタンの手に乗り、うっかり自分自身を高めたり、また自分で何かをやろうとすると、必ず失敗して打ち負かされてしまいます。

もし私たちが自分に死に、「無力」な者となって、何もやろうとしなければ、御霊様が代わりになしてくださいます。その時はじめて、勝利の生活を送ることができるのです。冒頭に掲げたガラテヤ人への手紙5章16～18節、24～25節のみことばを通して、パウロはキリスト者たちに御霊によって歩むように、切に願って

勧めているのです。

御霊による歩みとは、闘いがやみ、御霊様が私たちの内に、また私たちを通してなされる御業を見て生活することを言います。

2. 私たちのいのちであるキリスト

霊肉の闘いが終わったとき、パウロは「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」（ローマ7・25）と喜びの声をあげました。これと同じ意味のみことばがガラテヤ人への手紙2章20節です。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

パウロは、キリスト者のいのちは主イエス様のいのちであるべきだ、と言っているのです。キリスト者のいのちは、生まれながら持っているいのちより多少改善された「ましな」いのちというのではなく、御霊様によって新しく与えられた主イエス・キリストのいのちでなければなりません。「新しく生まれる」ということは、良くなったということではなく、主イエス様ご自身が、御霊様によって私たちの内にお入りになったことを意味しているのです。しかし、内に与えられたこの新しいいのちは、そのままであってよいのではなく、いよいよ成長して外に現われていかなければなりません。パウロはガラテヤの信者たちにこの点が欠けていることを知り、彼らのために苦しんでいたのです。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストがイエスの救い（9）　御霊による歩み

形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。（ガラテヤ　4・19）

御霊によって歩むには、私たちがイエス・キリストご自身のいのちで生きることです。

あるところに、子どもたちの教育に心を悩ませているクリスチャンの夫婦がいました。二人は子どもの教育をするには、自分たちはあまりにも忍耐が不足していると考えていました。そこで伝道者を招き、このために祈ってもらおうと頼みましたが、その伝道者は「祈っても多分、聞き届けられないでしょう」と言います。二人が驚いてそのわけをたずねると、「あなたがたに必要なのは忍耐ではなく、主ご自身です。忍耐、謙遜、柔和、愛、それらは、バラバラに与えられるものではなく、主ご自身を内に宿すとき、ともに与えられるものですから」と言われました。私たちが主ご自身に宿っていただくとき、私たちに必要な謙遜、柔和、愛、節制またその他のあらゆる徳が、主イエス様のいのちとともに、私たちの内に与えられるのです。

「永遠のいのち」とは、いったい何でしょうか。それは言い換えれば、主イエス様ご自身です。

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

（1ヨハネ　5・11～12）

主イエス様は「いのち」であり、「聖さ」、「謙遜」、「愛」であられます。

聖さとは何でしょうか。私たちは、主を信じたら少しずつ次第に聖くなっていくと考えていますが、それは聖さの「実」です。聖さは、主ご自身です。

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。

（1コリント　1・30）

あなたは忍耐を必要としているのですか？　忍耐は主ご自身です。私たちに愛や聖さが欠けているのでしょうか？　主ご自身が、愛と聖さそのものです。主イエス様は、私たちの持つありとあらゆる問題の答えとなってくださいます。

パウロはガラテヤ人への手紙2章20節で「キリストがわたしのうちに生きておられる」、つまり「キリストは私のいのちである」と言っています。私たちも、いよいよこの驚くべき現実に、心の目を開かれて行きたいものです。そして、次のように祈れたら幸いです。「主よ！　私は自分の力では、あなたのみこころにかなう生活を送ることができません。どうか、内に住み給う御霊様が私を用いて、みこころにかなう歩みをなさせてください」と。このように砕かれて、主にまったくおまかせする生涯に入れたら幸いです。主に任せることと、自分で試みることとの間には、天国と地獄の差があるのです。

キリスト者には霊肉の闘いがあることと、私たちのいのちがキリストであることに目が開かれるとき、御霊による歩みに確信をもつことができます。さらに御霊の法則について、学んでみましょう。

3．御霊の法則

パウロは新しく生まれ変わってキリスト者になってからも、長い間、罪に定められたような重い空気の中に住んでいたようです。そしてどんなに自分で努力しても、主の御心にかなった歩みをすることはできないと悟っていました。その経験を彼はこう言っています。「肉にある者は神を喜ばせることができません」（ローマ8・8）。その前の7章24節では「私は、ほんとうにみじめな人間です」と叫んでいます。

ところが、この同じパウロがピリピ人への手紙4章

イエスの救い（9）　御霊による歩み

13節では「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです」と言っているのです。このような大きな変化が、なぜパウロの内に起こったのでしょうか。その答えはローマ人への手紙8章2節にあります。「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」。いのちの御霊の原理は、罪と死の原理よりもさらに強いのです。

ここで少しこの二つの法則・原理について考えてみましょう。法則・原理とは何でしょうか。それは繰り返し起こる現象です。例えば、万有引力の法則があります。私たちが世界中のどこにいても、本を落とせばそれは下に落ちます。例外はありません。それは引力があるからです。

この引力の法則に似た法則が私たちの心の中にもあります。生まれながらの古い性質はいつも、この世に惹きつけられこの世のことを思います。パウロは働き人に向かってさえ、「彼らの思いは地上のことだけです」（ピリピ3・19）と攻撃しています。私たちキリスト者は死ぬまで、罪と死の法則を心の内に宿しているのです。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・18〜24）

問題はこの罪と死の原理・法則から、私たちキリスト者がいかにして解放されるかということです。それは、この法則が別なものに変わるか、または、その法則を支配するさらに強い法則が生まれることによって可能です。万有引力の法則があっても、本が手で支えられているなら、決して下には落ちません。引力より手の力の方が強いからです。同じようにキリスト者の内には罪と死の法則が潜んでいますが、それとは違う、より強い御霊の法則によって罪と死の原理の働きがとどめられます。

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ　8・2）

イエスの救い（9）　御霊による歩み

私たちは古い性質を持っていますが、「地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい」（コロサイ3・2）のみことばを心に留め、天的なものの中に、無限に成長していかなければなりません。

御霊様によって、主イエス様は私たちの内に住んでおられます。私たちは主のよみがえりの力にもあずかっています。この事実に心の目が開かれますように。

ところで、この御霊の原理・法則は、いかにして私たちの外に現われるのでしょうか。この御霊の原理の現われについて、もう少し考えてみましょう。

もし主イエス様が私たちのいのちとなっているなら、御霊様は私たちのできないことを簡単にやってくださいます。その時、罪と死の法則は少しも力を発揮することができません。パウロはこのような御霊の原理による勝利に到達するまでに、長い時を要しました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住ん

でいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

（ローマ　7・18）

パウロは長い間、勝利を自分の意志の力で得ようと努力していました。そのように努めている間は、主を喜ばせることはできず、ただ主を悲しませるばかりでした。多くのキリスト者も自分の「良い」意志の力で、何とかしてクリスチャン生活をまっとうしようと考えています。しかし、それはちょうど燃料の入っていない自動車を押して歩くようなもので、大変な骨折りです。聖書は語っています。

…神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ　8・2）

この二つのみことばは同じ一つの賜物について書かれています。私たちは勝利の生活を送るために新しい賜物を受ける必要はありません。ただ、主がすでに与えてくださった賜物に、心の目を開くことが必要なのです。主イエス様は、私たちにすべてを与えてくださいました。私たちは主が与えてくださったものに向かって、目を開きさえすればよいのです。8章2節には「御霊の原理が…あなたを解放したからです」と過去形で書かれています。自らの努力はまったく虚(むな)しく、それどころか妨げであることがわかります。もし私たちが自分の努力とすべての意志を主に明け渡すならば、実際生活において、御霊の原理がいかに力強いものかを経験するはずです。

主イエス様は山上の垂訓で「空の鳥を見なさい」（マタイ6・26）と言われました。その鳥に「万有引力の法則があるのに、よく落ちないで空を飛ぶことができるね」と声をかけることができるなら、鳥は「私たちは引力もニュートンも知らない。こんなふうに飛べるのは、私たち鳥の本来もっている性質だからだよ」と答えるでしょう。もちろん、鳥にも引力の法則は働いているのです。鳥が病気になり、飛ぶ力がなくなれば地に落ちてしまいます。

主イエス様がほんとうに私たちのいのちになっているなら、御霊の法則は罪と死の法則より強い、ということがわかります。御霊様が私たちの内に満ちておられるなら、主の御心にかなう生活をすることは実に簡単なことなのです。私たちの意志や努力で行なうのではなく、私たちの内に住み給う御霊様が、主の御心にかなう生活を送らせてくださいます。

キリスト者であっても、生まれつき忍耐のない人が忍耐をもつように努めるのは大変な闘いです。その闘いの結果は絶望的です。聖書は私たちが自らの努力をもっては、決して主の御心にかなう歩みはできないと教えています。また主は私たちができないことをよく知っておられ、そのために御霊様を遣わしてくださいました。この主が与えられた「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理」によって、真の善悪をわきまえることができるのです。いくら教育を受け教養を積んでも、主の御心にかなった生活はできません。ただ、私たちの内に住み給う主ご自身によってのみ、主の御心にかなう生活が可能です。その時、「自分の話し声は大きすぎた」「この笑いはよくない」「これは誤った動機だ」…など、いろいろなことが御霊様によって教えられます。

御霊様なしで、どんなに自分が注意し努力しても、自分の歩みを正しく保つことはできません。桃の木は桃の木です。おしゃべりな人はよく話します。それが生まれつきの性質だからです。御霊様の新しい強い法則に目を開かなければ、決して自らの古い性質に打ち勝つことはできません。

私たちの内に宿り給う主イエス様は、ご自身で私たちの生活を自由に導いてくださいます。もし、どうし

イエスの救い（9）　御霊による歩み

ても愛することのできない人がいるなら、主により頼んで「どうか、主よ。あなたによってあの人を愛させてください」と祈るとき、御霊様の法則がどんなに強いかがわかるでしょう。

肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

（ローマ　8・3、4）

このみことばには、二つのことが書かれています。一つは、もうすでに主が私たちのために何をなしてくださったかということ、二つ目は、主は私たちの内に、何をなそうと願っておられるかについてです。

主イエス様は、罪と死の法則を無力にするために、罪を担って亡くなられました。そして、内住の御霊様が法則をまっとうなさることにより、「御霊の原理」が「罪と死の原理」より強いことがわかります。もし私たちが霊によって歩むなら、内住の主は主の御心にかなった歩みをなすことができることを、はっきりと知るでしょう。

さて、霊による歩みとは何を意味しているのでしょうか。それは、一つの「働き」ではなく「歩み」です。かつては御心にかなう者になろうと闘い、努力していた人が、今は内に住み給う主にすべてをなしていただくのです。パウロは「肉による働き」と「御霊の実」という二つのことばを使っています。私たちは自分の力で、肉によって努力することはできますが、そのときは実を結ぶことができません。御霊の実は、内住の主にすべてをゆだねて歩むときにだけ、豊かに結ばれてくるものなのです。

また、霊による歩みとは、まったく御霊様に従わなければできません。肉に従っている間は、肉による歩みをしているのです。

肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。

（ローマ　8・5～8）

霊による歩みとは、霊に従っていることを意味しています。霊に従って歩むときはじめて、御霊の法則の力を知ることができ、外に現わすことができます。そしてパウロのように「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」ということができるのです。御霊様のご支配の内に、まったく自分の身をゆだねてはじめて、御霊様による歩みができるのです。

もちろん、いつも御霊様との交わりの中にいることが、霊によって歩むためには欠かせません。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

（2コリント　13・13）

主である神様の愛は、あらゆる霊的祝福の源です。主イエス様の恵みにより、すべての祝福は私たちのものとなるべく、備えられています。そして、御霊様との交わりは、この量り知れない富を私たちのものとする道なのです。御霊様は私たちにイエス様の持っているあらゆる富を与えるために、おいでになられました。

私たちが御子イエス様を受け入れた時、同時に私たちは聖霊の宿り給う「神の宮」となりました。御霊様は、神の御心を私たちに示し、私たちを導き、私たちを祈らせるために、私たちの内に住んでおられるのです。

イエスの救い（9）　御霊による歩み

私たちは御霊様が私たちの支配者であることを感謝し、その支配にすべてをゆだねたいものです。

最後に、自分たちが聖霊の宮であることを知って、御霊様の声に従ったある夫婦の話をしましょう。

人気（ひとけ）のない、寂しい山の中に住んでいるある夫婦が、旅人を通して信者になりました。その時、旅人は「信者として大切なのは、もうあなたがたは自分のものではなく、内に宿っておられる聖霊の宮であることを知ることだ」と言って、立ち去って行きました。旅人が去ってから、主人は祈ろうと思いますが祈れません。いろいろと原因を考えたとき、それまでぶどう酒をたくさん飲んでいたことが御心にかなわないのではないかと気づきました。それで奥さんと一緒に聖書を調べ、ぶどう酒について書かれているところを探しましたが、まだ信仰をもったばかりですからよくわかりません。けれども、内にささやく声は「ぶどう酒をやめる」ということです。

しばらくたって、以前の旅人が再び訪れたとき、夫婦は旅人にぶどう酒のことを話しました。「あなたもいないし、聖書もわからなくて困りました。でも、心の中に住んでおられるお方に聞き従ったので、助かったんです」と言いました。すると、旅人は「その心の内に住み給うお方にいつも従っていれば、大丈夫ですよ」と答えたということです。

私たちは内に住み給う御霊様を個人的にはっきりと知っているでしょうか。そして、住み給う御霊様の声に単純に聞き従っているでしょうか。

本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄 暦年ファイル」に録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い（10）キリストのからだ」です。



あなたはどう読んでいますか

岡本雅文

聖書を読む、あるいは聖書を学ぶということは、どのようなことでしょうか。それは聖書が告げている唯一の「まことの神」、すなわち「イエス様ご自身」をよく知ることではないでしょうか。そのためには先入観を捨て、聖書そのものに耳を傾けるように読むことが何よりも大切です。使徒ヨハネは次のように書いています。

いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。
（ヨハネ　1・18）

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。
（ヨハネ　14・6）

聖書はひとり子の神、すなわちイエス様が説き明かしてくださった「まことの神」の証しです。聖書を読み進めるにしたがって、その説き明かされた神が次第に「かたち」になってきます。その様子は多くのピース（断片）を組み合わせて作り上げて行く「ジグソーパズル」に似ています。一つ一つの聖書の箇所（ピース）はもちろん非常に大切ですが、一つのピースだけでは全体像はわかりません。前後左右にふさわしいピースが継ぎ足されて行くうちに、それが何を伝えようとしているのかが少しずつ明らかになって来ます。期待しつつ、ご一緒に聖書から「あるサマリヤ人のたとえ」（ルカ10・25～37）に触れてみたいと思います。

はじめにこの箇所を三つの部分に分けて読みたいと思います。

【前半】すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどう読んでいますか。」すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人（となりびと）をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」

イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」　（ルカ　10・25～29）

【後半】イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合（きあ）わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱（かいほう）してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」
（ルカ　10・30～35）

ここで「たとえ」が終わりました。イエス様は最後に律法の専門家に言われました。

あなたはどう読んでいますか

【最終節】この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

（ルカ　10・36～37）

こうしてイエス様と律法の専門家との対話は終わりました。イエス様は少し前の「種まきのたとえ」（ルカ8・4～18）では、その「たとえ」の意味を弟子たちに詳しく話してくださいました。しかし、「あるサマリヤ人のたとえ」の場合は、律法の専門家にも弟子たちにも説明されませんでした。そのこと自身が、表題どおり「あなたはどう読んでいますか」と問うておられるようです。このイエス様の問いかけに、ご一緒に答えてみたいと思います。

1.「あるサマリヤ人のたとえ」（前半）

（1）前半の登場人物はイエス様と律法の専門家の二人です。ある律法の専門家がイエス様に質問する場面から始まります。先ほどの箇所のすぐ前の20、21節に目を向けると、「父なる神のみこころにかなったことは何か」ということについて語られています。

イエス様は弟子たちに言われました。「ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」（20節）。「これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」（21節）

「これらのこと」とは、「あなたがたの名が天に書きしるされていること」と言われたように、ひとり子の神（イエス様）が、神を説き明かされた真理のことばでした。また、次の「これがみこころにかなったことでした」と言われた「これ」とは、この真理のことば（究極的にはイエス様ご自身）を「賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださったこと」でした。

イエス様の著（いちじる）しい特徴は、人の賢さや知恵とは無縁の、幼子のような人々を弟子に選ばれるという生き方、価値の置き方にありました。

（2）このような福音が話されていたその最中に、突然、一つの問いが投げかけられました。「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。『先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。』」これが、今まで21節で指摘しておられた賢い者、知恵ある者の、最初の問いでした。イエス様は弟子たちから律法の専門家に目を移されました。「何をしたら」という彼のことばの中に、自分の行いを義（正しい）とする高ぶりと、主ご自身をためそうとする企（たくら）みの種を見抜いておられました。この人は、「永遠のいのちを自分のものとして受けること」は、何らかの「行ない」によって得るものであると考えていたのです。

律法の専門家の動機はどうであれ、問いそのものは全ての人にとって大切な「永遠のいのち」に関するものでした。使徒ヨハネは、彼の手紙に次のように述べています。

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

（1ヨハネ　5・13）

（3）イエス様は律法の専門家のこの問いに対して、「律法には、何と書いてありますか。」また、「あなたはどう読んでいますか。」という二つの問いをもって、彼の専門とする律法で答えるように導かれました。こうして律法の専門家は、自分の問いに自分で答えることになりました。「律法には、何と書いてありますか。」と聞かれたことに対して、彼が選んだ律法の戒めは二つありました。

一つ目は、「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」（申命

あなたはどう読んでいますか

人々」、すなわちユダヤ人（同国人）でした。このことをよく知っていたはずの律法の専門家が新たに提起した問いには、悪意あるパン種が入っていました。ここで、前半が終わりました。

2.「あるサマリヤ人のたとえ」（後半）

イエス様はその問いを受けて、「善きサマリヤ人のたとえ」として知られている「たとえ」を話し始められました。

（1）この「たとえ」を話し終えると、イエス様は再び律法の専門家に尋ねられました。「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」すると、律法の専門家は答えました。「その人にあわれみをかけてやった人です。」

サマリヤ人が強盗に襲われた者を助けてやった行ないを、彼はただことばにしただけでした。彼自身がイエス様に質問した「私の隣人」は、律法の専門家のことばにも、心にも、どこにも見当たりませんでした。彼は「自分（私）の隣人」を知りたいと思っていなかったのでしょう。

彼は「あなたの隣人は、サマリヤ人です。」と、ここまで導かれていながら、「自分自身」が「強盗に襲われた者」であることも、「その隣人であるサマリヤ人」は目の前におられる「イエス様ご自身」であることも、知ることができませんでした。彼には、この「たとえ」の意味は隠されたままでした。

律法の専門家は律法をこのように読んでいました。いや、このようにしか読んでいなかったのです。

（2）真理が隠されている彼をそこに残して、私たちはイエス様のみこころを求めて、さらに先へ進みましょう。

律法の専門家の二番目の問いに対するイエス様の答えは、「あなた（律法の専門家）の隣人はわたし（イエス）です」でした。この「結論」は、「渇くことがない永遠のいのちの水」（ヨハネ14・14～15）を求めたサマリヤの女にイエス様が告げられたことばそのものです。

女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれ（メシヤ）です。」（ヨハネ 4・25～26）

（3）ここで、律法の専門家が選んだ二つの律法の戒めを、私たち自身で読んでみたいと思います。

「あなたの隣人はわたし（イエス）です」という結論を、律法の専門家が選んだ二つ目の戒めに当てはめると、「あなたの隣人である主イエスをあなた自身のように愛せよ」と読めます。

また、イエス様ご自身が「わたしと父とは一つです。」（ヨハネ10・30）と言われているのですから、一つ目の戒めの「…あなたの神である主を愛せよ。」も「…御子

あなたはどう読んでいますか

記6・5）、二つ目は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」（レビ19・18）でした。

律法の専門家の返答を聞いたイエス様は、「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」と同意されたように見えました。しかし、本当は彼を「あわれまれた」のではないかと思うのです。

すると、律法の専門家はイエス様が自分の返答に同意されたと見るとすかさず、「自分の正しさを示そうとして」自分で選んだ二つ目の戒めから、「あなたの隣人」というフレーズを取り出して再び問いかけました。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」

彼が主の問いに答えるときに引用した二つ目の戒めは、レビ記19章18節の後半の一部分だけでした。全文は下記のとおりです。「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨（うら）んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。」

律法に書かれている「あなたの隣人」の意味は、省略されていた部分に書かれていました。「あなたの国の

キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。（ローマ　10・4）

しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。（1ヨハネ　5・20）

「永遠のいのちを自分のものとして受ける」ことは、律法の専門家が考えていたように「何かをしたら」ではありませんでした。聖書のあらゆる箇所から聞こえて来る主なる神のみこころは、「まことの神、永遠のいのち」である御子イエス・キリストご自身を知ること、すなわち、主を愛することでした。

3.「たとえ」の中の登場人物とイエス様の最後のことば

（1）イエス様は、律法の専門家を「瀕死（ひんし）の重傷を負い半殺しにされた」その人として見ておられました。しかし、律法の専門家は「永遠のいのち」を口にしながら、目の前におられる「永遠のいのち」そのものである救い主を知ることなく、「永遠の死へ向かう道」をひたすら走り続けていました。

イエス様はこの「たとえ」の中で、彼の真実の姿を伝えられました。「このままでは、あなたは永遠に失われてしまう。死んではいけない」。このようにあわれんでくださいました。耳のある者には、「わたしがそれ（あなたの隣人）です」と言う声が聞こえるように、問いかけてくださいました。「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者（あなた）の隣人になったと思いますか。」（36節）と。

しかし、律法の専門家には、強盗に襲われた「その人」は「自分」ではなく、最後まで「見知らぬ人」でした。「その人の隣人（サマリヤ人）」も、彼の専門の律法の範疇（はんちゅう）を超えた見知らぬ異教の人でした。彼の答えは「（私の知らない）その人に、あわれみをかけてやった（異教の）人です」（37節）でした。

彼は、イエス様が何を言おうとされているのか、幼子にわかることが理解できませんでした。

（2）また、律法で愛するように命令されている同国人（隣人）の災難を、見て見ぬふりをして通り過ぎた祭司やレビ人も、律法の専門家自身の姿でした。律法の専門家たちの偽善と不敬虔（ふけいけん）な性質は、傍（かたわ）らでこの「たとえ」を聞いている弟子たちや、私たちの心にも宿っていることを私たちは知っています。

しかし、その偽善と不敬虔を自分の内に認める時に、いまだかつて私たちの心に思い浮かんだことのない、私の隣人に出会います。計り知れない恵みに出会います。

聖書は何と言っていますか。・・・何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めて下さる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。（ローマ　4・3、5）

あなたはどう読んでいますか

イエス・キリストを愛せよ」と読めます。

そうすると、律法の専門家が選んだ、律法の二つの戒めの本質は一つです。二つの戒めは一つの戒めとして次のように読むことができるのではないでしょうか。「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、まことの知性を尽くして、幼子のように、あなたの隣人である神、すなわち御子イエス・キリストをあなた自身のように愛せよ」と。

イエス様は、「律法を行なうことによって義と認められる」という、ユダヤ人たちが固執してきた律法を終わらせるために来られました。そして、「わたしがそれです。」と言われる方を「完全な律法、すなわち自由の律法」（ヤコブ1・25）として信じ、愛するようにと私たちを導かれました。

こうして、「私の隣人とは、だれですか」というパン種の入った問いは、律法の専門家の意に反して私たちを「律法の終着点」へ導く貴重な贈り物となりました。聖書は次のように証言しています。

イエス様は、律法の専門家たちと全く同じ性質をもっている私たちが、「どこへ行って、どうすればよいか」告げるために、この「たとえ」を話してくださったのではないでしょうか。このたとえを聞いて、隣人（主ご自身）に従って来るようにと。

（3）さらに、祭司やレビ人、すなわち律法の専門家たちは、「ある人を襲った強盗」でもありました。彼らは、イエス様に出会う前のパウロ（サウロ）のように「律法の文字」を盾にして、律法が告げる隣人なる同国人（民）さえも訴える者たちでした。

これが、聖書が告げる、「自分の生まれつきの顔を鏡で眺めてから立ち去る人」（ヤコブ1・23～24）ではないでしょうか。最も大切な主の愛が欠けた律法の偽専門家たちの真実の姿です。まるで、中央に収まるはずの「愛」という形のピースが欠けたジグソーパズルのようです。

「わたしがそれです。」と言われるまことの隣人から目を離さないでいる時にだけ、御父および御子イエス・キリストとの喜びの交わりへと導かれます。

例えば、次の聖書の箇所はそう告げています。

ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。（ヤコブ　1・25）

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。（ヘブル　12・2）

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。（1ヨハネ　1・3）

（4）最後に、イエス様は律法の専門家に言われました。「あなたも行って同じようにしなさい。」（ルカ10・37）

律法の専門家の声はもう聞こえません。彼がどのようにイエス様の前から去って行ったのか、この箇所は沈黙しています。しかし、別の箇所でこの律法の専門家と同じ質問をした人たちがいます。ルカの福音書18章18～27節、マタイの福音書19章16～24節およびマルコの福音書10章17～23節の三か所で、質問者はそれぞれ「非常に悲しんだ」、「悲しんで去って行った」、「このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った」と書かれています。

さらに、全く別の場面では、イエス様はパリサイ人と言われる律法の専門家たちに、彼らの行くべき方向を指し示しておられます。

「わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。」とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。（マタイ　9・13）

これらの聖書箇所において、律法の専門家たちはみな、イエス様の前から姿を消しました。イエス様はユダヤ人の律法の専門家たちに、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くしてあわれみながら、福音を告げてくださいました。それにもかかわらず、彼らは去って行きました。しかし私たちは、私の隣人（イエス様）がおられる、あの「たとえ」の最後の場面に戻りましょう。

4．弟子たちが連れて行かれたところ

「たとえ」を話し終えられた後、イエス様は弟子たちを連れて旅を続けられました。そして、愛するマルタとマリヤが住んでいる（ベタニヤ）村に入られました。（ルカ10・38～42）そこで彼らは一つのことばを聞きました。

あなたはどう読んでいますか

どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。（ルカ　10・42）

イエス様が愛していたマルタとマリヤと弟子たちに告げられた、どうしても必要なただ一つのこととは、マリヤが「主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた」（ルカ10・39）ことでした。

「あなたも、あのエリコに下る道へ行って、あの宿屋へ行って、ベタニヤ村へ行って、あわれみを受けたあの人と同じように、またマリヤと同じように、わたしの所に来てわたしの愛を受けなさい。そのように、わたしにとどまりなさい」と今日も同じ声が聖書から聞こえて来ます。

そこが、何をおいても、まず第一に、私たちの行く所です。そこで、あのサマリヤ人が、イエス様が待っておられます。そこから全てが始まります。

最後にイエス様は、弟子たちをエルサレムに連れて行かれました。弟子たちはまず、イエス様から次のことばを聞きました。

わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ　15・5）

エルサレムで彼らは、イエス様が十字架で彼らの罪のために死に、墓に葬られ、よみがえられるまでの足掛け三日の間、ユダヤ人を恐れて戸が閉められた部屋に潜んでいました。（ヨハネ20・19）彼らは主のいない暗やみの中で、迷い出た牧者のいない滅びる羊のようでした。（詩篇119・176）

その部屋は、あのサマリヤ人に助けられた人が、瀕死の状態で苦しみながら連れて行かれた宿屋のようでした。弟子たちもその部屋で、あのサマリヤ人（イエス様）が代わりに支払ってくださった「デナリ二つ」の宿賃「二日分のパン」を与えられ、回復の時までそこにとどめられました。

主があなたがたに安息を与えられたことに、心せよ。それゆえ、六日目には、二日分のパンをあなたがたに与えている。七日目には、あなたがたはそれぞれ自分の場所にとどまれ。その所からだれも出てはならない。（出エジプト　16・29）

弟子たちのあの日の、あの部屋は、古い自分の「死」と「葬り」から目覚めて、「いのちにあって新しい歩みをする」ようになった喜びの記念の「墓」となりました。（ローマ6・4）こうして、律法の専門家の「何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」という問いは、弟子たちに、そして「彼らのことばによって主を信じた私たちにも」確かに答えられました。（ヨハネ17・20）

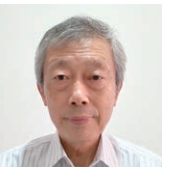
5．おわりに

私たちもあのエリコへ下る道で助け出され、ベタニヤ村で憩いを得、エルサレムのあの丘で、またあの部屋で、主が十字架で流された血潮ゆえに「永遠のいのち（私の隣人）」をいただきました。神の奥義であるイエス・キリスト、この方を幼子のように信頼する恵みにとどまることができますように。「あなたはどう読んでいますか」の結論として、パウロの言葉をもって結びといたします。

私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたことです。（1コリント　15・3～4）

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。（1コリント　2・2）

あなたはどう読んでいますか



岡本 雅文（吉祥寺キリスト集会）



主と共に歩む道は

小嶋 鏡介



ベックさんと

私は昭和二十二年（一九四七年）、現在住んでいる京都で生まれました。三人兄弟の末っ子で、上のふたりは姉です。父は京友禅の図案家として成功し、経済的には恵まれていたと思います。

私は父の影響で子供のころから独自の絵も描いていましたが、中学時代はブラスバンド部に入部して、その頃あこがれていたグレンミラーと同じ、トロンボーンを担当しました。大学生になってからも二回生まではビートルズ、三回生になるとピーター・ポール＆マリー（ＰＰＭ）に心を奪われ、三回生からアメリカ民謡研究会というクラブに入って、現在、彦根市に住んでいるＩ姉妹と出会い、ＰＰＭのコピーバンドを作って活動しました。四回生になると今度はママズ＆パパスのコピーバンドに参加し、そこで家内の洋子姉妹とも出会いました。このようにして、私は青春を充分に楽しみました。

一九七二年に私たちは結婚し、ふたりの男の子が与えられました。そして長男、橘平の思春期からの心の病を通して、私たちはイエスさまと出会いました。

大学時代から夫婦共通の友人として付き合いが続いていたI姉妹が、二〇〇〇年六月に「ドイツ喜びの集い」に誘ってくれ、イエスさまを紹介してくれたのです。三十年以上の長い付き合いは、イエスさまのご計画であったということです。

さて、私の人生をご紹介するうえで欠かせないものとして、バイク趣味があります。私は中学生の頃からバイクが好きになり、本当にのめりこみました。あの大排気量のバイクの鼓動と排気音に魅了されていました。

ところが、イエスさまを知って数年後の二〇〇五、六年頃にはそれらのことが一挙にむなしく感じられるようになり、結局は全部手放してしまいました。今でも、あれだけ大好きだったバイクのことがなぜむなしくなったのかはわかりませんが、まさにイエスさまによる取り去りだったのでしょう。

あなたを贖う主、イスラエルの聖なる方はこう仰せられる。「わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。

（イザヤ　48・17）

主は仕事を通して、私を砕いて、訓練してくださいました。私は子供のころから色々な絵は描いていましたが、本格的に図案の勉強を始めたのは大学を卒業してからのことです。父は江戸時代から続く老舗の呉服問屋の会社の専属図案家として成功していましたから、ほかの先生方のもとでも学んだほうが良いというので、私はその会社の「図案室」と自宅とで基礎から修業を始めました。

しかしその頃は、かつて全盛を誇っていた呉服業界

にも陰りが出始めていました。色彩感覚も柄行きも、少しずつ変わってきていたのです。また大切な「図案代」の予算も削られ始めていました。会社の人たちはそれらを全部、「大先生」である父には言えず私に言うのです。そして私から父にそのことを伝えると、父は激怒し、描きかけていたデッサンをクシャクシャにして私にぶつけたりしました。このことはずっと後まで続き、私は父と会社との板挟みになって、ずいぶん悩みました。ストレスで肝機能の数値が上がり、ストレス性肝炎と診断されました。このことは父が第一線を退くまで続きました。

父は一九九八年に九十六歳で召されました。その二年後に私たち夫婦はイエスさまを紹介されたのですが、その頃から仕事先の老舗呉服店はどんどん景気が悪くなり、私の仕事もだんだん減らされていきました。

しかしこのころ、私にとって、とても嬉しい出来事がありました。二〇〇〇年に「ドイツ喜びの集い」に参加してイエスさまを紹介されたのですが、その時私は「これは絶対に宗教だ」と思い込んで反発し、予定されていたミヘルスベルクからのピクニックをボイコットして施設に残り、シュベスター（ドイツ語で、主なる神に仕えるため生涯を捧げている女性のキリスト者たちのこと）や施設の周辺をスケッチしたことがありました。それらが吉祥寺キリスト集会の「麦の会」によって、みことばのカード集『シオンの娘たち』と題して発行され、日の目を見たのです。このことはほんとうに嬉しくて、主に心から感謝しました。

また、偶像礼拝とも縁が切れました。私の家は代々浄土宗で、父は檀家総代までやった人でしたので、お寺さんにはかねてから、それを継いでほしいと言われていたのですが、ある時、「正式にお願いに上がります」と連絡があったのです。私は悩んで、ともかく「イエスさま、どうすればいいですか？　どのように断れば

6人の証し

Unser HERR lebt

いいでしょうか?」と祈っていると、ふと心の中で「引き受けなさい」という声が聞こえました。「えっ?」と尋ねる私に「ただし、証しをしなさい」という声が続きました。何だかよくわかりませんでしたが、私はその声に従いました。

お寺さんが来られた時に「引き受けます」と答えたあと、私は二〇〇〇年六月にドイツでイエスさまを紹介されたことや、そのあと息子が起こした交通事故で、被害者の方から強く脅され、お金を要求されて、とても怖い思いをしたけれども、のちに、私たちの集会のある方がその脅していた人の仕事の上司であることがわかり、いっぺんに問題が解決したことなどを証ししました。

そうするとお寺さんは「ああ、良い話を聞かせてもらいました。ですが、クリスチャンになられた方に檀家総代をやってもらう訳にはゆきませんから」と言って、むこうから断られたのです。

また家の近所には、京都中の料理屋さんが信仰する古くからの神社があり、例年のお祭り以外にも氏子としてのいろいろな集まりや奉仕がありましたが、不思議なことに神主さんの不祥事がもとで、その神社も取り去られました。こうして私は偶像礼拝の手伝いからも、主によって解放されました。

さて、会社の状況はさらに厳しくなってきていました。が、その頃は聖書もよく読むようになっており、特に申命記8章と詩篇45篇のみことばが強く私に迫っていました。

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩まされた全行程を覚えていなければならない。それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

（申命記　8・2）

娘よ。聞け。心して、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。

（詩篇　45・10）

このどちらのみことばも、その時点ではどういう意味かわかりませんでしたが、やがて図案の仕事がほとんどなくなり、私の失職というかたちで、主はみこころを示されました。せっかくイエスさまを信じるようになったのに、なんということでしょうか。

しかしイエスさまは、ご利益宗教ではありませんでした。私は五十九歳にして初めてハローワークに行きました。はじめは今まで永年やってきた経験を生かして、などと考えていましたが、そんな仕事は皆無でした。たった一社だけ見つかったのが地域の詳細地図の広告取りの営業で、慣れない飛び込みの営業を続けましたが、結局、体調を崩して一年で辞めました。

その時ふと見た新聞の折り込みチラシに「年齢、経験不問。あなたの優しさを待っている方たちがいます。」というのがあり、病院のケアワーカーの面接を受けました。会ってくれた看護師長さんは「このあいだも六十歳の人が来たけど、三日で辞められたよ。あなたはどうですか? でも、ともかく来てみて」と言われて時給もいいし、行ってみようと思いました。家内からは、私には「人様のお世話をするような仕事は、絶対に向いてないよ…」と言われました。確かに、何をやっても生まれて初めてのことばかりで、何が何だかわかりませんでしたが、歯を食いしばって続けました。古株の先輩女性たちから激しい罵声を浴びながら、一生懸命にやりました。

私は知らないうちに、四十年間歩んだ「父の家を忘れて」（詩篇45・10）、新しい道を主と共に歩んでいました。

そのような中に突然の訃報が入りました。二〇〇八年十一月のことでした。当時松山に転地療養していた

6人の証し

Unser HERR lebt

長男の橘平が召された、と警察から電話があり、私は家内と次男の龍介とで、急いで松山に向かいました。橘平は「これが最善です」と書かれたメモを残し、旅立ってしまいました。

子供に先立たれた親の気持ちというのは、なったものにしか分からないと思いますが、彼は苦しむだけ苦しんだので、これはイエスさまが許されたことなのだと受け止めることができました。この時もこれまでの数年間も、私たちは松山キリスト集会の方々にひとかたならぬお世話になりました。いまでも感謝しています

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。
（マタイ　5・4）

わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。わたしは彼を導き、彼と、その悲しむ者たちとに、慰めを報いよう。
（イザヤ　57・18）

私たちはこれまで橘平のことばかりにかかわって、次男の龍介にはずいぶんと寂しい思いをさせてきたので、家内とともに彼に謝りました。彼は集会での葬儀などを通して兄弟姉妹と触れることになり、私たちのイエスさまへの信仰が、おかしな宗教ではないことを知ってくれることとなりました。私たちは寂しくはありましたが、イエスさまのみことばの支えのおかげで平常心が保たれました。

さて、ヘルパー2級の資格も得、できれば夜勤のない職場をということで、デイサービスの仕事を捜していた私でしたが、いくらギターや絵を描く特技があると訴えても、私に門戸を開いてくれる施設はありませんでした。

ただ一か所だけ、むこうから来てほしいと言ってくれたところがありました。その頃新しく始まった介護形態である「小規模多機能居宅介護事業所」というところでした。仕事内容は、ひとりで何役もこなさなければならず、もちろん夜勤もあり、以前に行っていた病院より給料ははるかに低いのです。「主よ。これがあなたの道なのですか?」と尋ねつつ通い始めました。

早出、日勤、十一時出勤、遅出と目まぐるしく変わる出勤時間のため、厳しい生活リズムだったのですが、家内は自分自身が家政婦として、やはりきつい仕事をしていたのにもかかわらず、一度も不平を言わず、黙々と九年間、手作り弁当を持たせてくれました。とても感謝でした。

何もわからなくて、常に不平を鳴らす私を忍耐して支え続けてくださった主イエスさまのあわれみにも感謝でした。

あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主が、あなたを訓練されることを知らなければならない。
（申命記　8・5）

6人の証し

Unser HERR lebt

九年間続けた仕事は体調を崩したことで、終了となりました。でも、ゆっくりしている間はありませんでした。「主よ、次は何をしましょう」と祈っていたら、主はひとつのイメージを私の心に送ってくださいました。

それはかつて親しんだキモノの柄を、お客様ご自身に描いてもらうという、体験教室（ワークショップ）のイメージでした。難しい部分は私が先に描いておいて、お客様には塗り絵感覚で模様を完成していただくというものです。ともかく試作のものを作って息子の龍介に試してもらったら、行けそうだということで、彼は手際よくネット上にホームページを作成し、チラシや名刺等を作ってくれたのです。息子は印刷会社のデザイナーになっていたので、それらをセンス良く作ってくれたのでした。教室はもと図案を描いていた自宅の十八畳の部屋を使えます。

こうして二〇一七年四月に新しく「キモノアートワークショップ鏡屋」として京都市東山区の自宅で新

しい店をオープンしました。家内も十二年間頑張った家政婦の仕事を辞めて、お店の手伝いをしてくれます。私はもうこれで主の訓練は終わったのかなと希望に胸を膨らませていました。

ところがワークショップをいざ始めてみると、訓練はまだ続くのでした。SNSなどにも発信して鏡屋の開店をアピールしたのですが、お客さんが集まらないのです。しばらくすると海外からもぽつぽつと予約が入るようにはなりましたが、人数的には国内からの方と合わせても、月間目標の二、三割行けばいいほうというぐらいの状態でした。とにかく私たちの生活は、まったくイエスさま任せということになりました。

貧しい者は幸いです。…　（ルカ　6・20）

主に頼らざるを得ない毎日は祈りを忘れることがなく、それはそれで感謝なのですが、なにせ私たちには蓄えというものがないので、日々の生活はとても厳しくなりました。私は主がお与えになる訓練や試練には、人によって、何かタイプのようなものがあるのではないかと思いました。それが主から与えられるそれぞれの十字架なのでしょう。そんな時、ある集会の方がみことばを送ってくれました。

その日、わたしはダビデの倒れている仮庵（かりいお）を起こし、その破れを繕（つくろ）い、その廃墟を復興し、昔の日のように建て直す。…――これをなされる主の御告げ――見よ。その日が来る。　（アモス　9・11）

なんという希望の持てるみことばでしょう！　主が昔の日々のように建て直すと宣言して下さっているのです。でも現実の私は見えるものを見て、ますます暗闇にはまって行って、苦しみのどん底にまで落ち込んでしまいました。私は、失われた状態にまで落ちてしまったのでした。

「見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。私は悩みの炉であなたを試みた。わたしのため、わたしのために、わたしはこれを行う。わたしの名が汚されてよかろうか。わたしはわたしの栄光を他の者には与えない。」　（イザヤ　48・10、11）

また、親しくしていたHご夫妻が、一度お宅に話しに来ないかと招いてくださいました。ここぞとばかりに私はメモ帳に、イエスさまからこれまで受けた辛（つら）かったことを箇条書きにし、その方に聞いてもらおうと持っていったのです。本当に重く真っ暗な心のままで行きました。

でもそのご主人は、「あなたが抱えている問題は今にはじまったことではない。初めて知り合ったころからあなたは同じようなことを言っていた。それがあなたに課せられたオーダーメイドの試練なんだろうね」と言われました。

次いで奥様に、「礼拝で賛美も感謝もできないんです」と話したら「礼拝に集っている方々はいろんな心境の人がいらっしゃるのだから、自分の思い通りのことを祈ってみればどうですか」と言ってくださいました。それを聞いて私は少し気が楽になり、その次の聖日礼拝で私は立って「主よ。いまの私の霊的状態や心境ではとても感謝も賛美もできません。お許しください」と正直なお祈りをしたのです。そうしたら、それを聞いていた集会の方が次の週に「小嶋さん、試練が多いのだったらこれを読んでみてください」と言って小冊子を渡してくれたのです。それはウォッチマン・ニーの『賛美をする』と言うメッセージでした。

「嬉しい時、喜んでいるときには賛美はいとも簡単にできます。でも自分にとってマイナスなことが起きた時、つらく苦しい時にはなかなか賛美はできないも

6人の証し

Unser HERR lebt

のです。でもそんな時にこそ、主イエスさまは、あなたの賛美を待っておられるのです。それが賛美のいけにえです」ということが切々と書かれていました。

「賛美のいけにえ」――それを読んで私の目から涙があふれました。私は自分のことしか見えていず、そんな私のためにイエスさまは十字架にかかって死んでくださったのだということが、やっと心に重く響きました。そこで初めて「イエスさま。こんなどん底の私ですが、ただあなたの御名を賛美し感謝をささげます」と心をふりしぼって祈りました。

そうしたらです。それから一日も経たないうちに突然、大きな絵を描く仕事が入ってきたのです。ちょうどコロナが始まった時期で、お客さんの足はぴたりと止まっていました。しかしそれだけではなく、主は別の方法でも不思議な養いの力をどっと見せてくださったのです。私は、前にいただいていたアモス書9章11節のみことばが成就した、とビックリしました。

イエスさまの訓練は生半可なものではありません。でもその訓練には段階があるようです。主は私たちの霊的成長を望まれて、心の目と耳がもっともっと開かれるよう、導いておられるのだと知りました。まさに私たちの一生はジョン・バニアンの『天路歴程』のようなものだと思いました。これまで起きてきたことのすべて、いまから起こることのすべての背後に、主は目的をもって導いておられ、何ひとつ偶然はないのだとわかりました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって、主は彼らを贖い、昔からずっと彼らを背負い、抱いて来られた。（イザヤ　63・9）

今回、この証しを書くことによって、私は若いころから、本当に恵まれた生活をして来られたのだということを、あらためて自覚しました。そんな者を一からたたき上げるために、イエスさまがどれほどの忍耐をもって導いてくださったかがわかりました。私が苦しい時には、イエスさまは自分に対してひどいお方だと思ったのですが、その大きな間違いを悔い改める恵みをいただきました。どうしてこんなつまらない者のために主が十字架にかかって下さったのか、その考えられないご愛にただただ感謝し、ひれ伏すばかりです。

今は全部で約八十種類以上になった自作のみことばカードを、必要な方のところに届きますようにと日々祈りつつ作成しながら、心穏やかに過ごせるように変えられて参りました。

いま現在も、新たな経済的ひっ迫があり、また霊的な仕事とこの世の仕事に忙殺される毎日です。でも、やっとのことで、それらがあっても、もう深刻に悩まなくなりました。何があっても、必ずイエスさまが何とかしてくださる。必ず最善を導いてくださると信じられるようになってきました。

…それはあなたを苦しめ、あなたを試み、ついにはあなたをしあわせにするためであった。（申命記　8・16）

ふと目を上げれば、身近な家族が滅びに向かって苦しんでいることがわかりました。その家族の救いのために、祈り始めているところです。

どんな時にも夫婦ともに祈り合い、支え合い、イエスさまを礼拝賛美できますことを日々感謝しつつ、いまの私たちがあります。

今年（二〇二二年）、後期高齢者になりますが、私たちの天路歴程はまだまだ続くようです。

主とともに歩む道は、
どこまでも、どこまでも、楽しく、
主とともにたどる行く手は、

6人の証し

光のかなたの御国。

『日々の歌』一六七番

「風吹きつのる道に悩み」より

小嶋 鏡介（こじま きょうすけ）

一九四七年八月一日生まれ。京都市立洛東（らくとう）中学校、京都市立日吉ヶ丘高校、京都外国語大学 英米語学科卒

キモノアートワークショップ鏡屋 講師

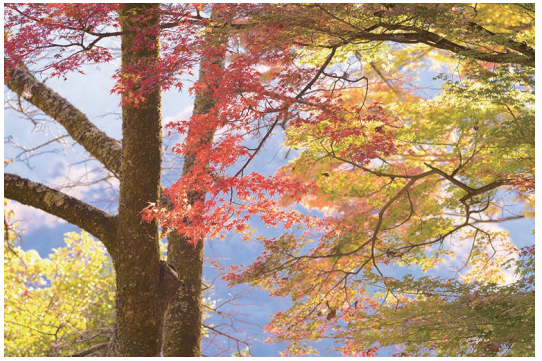
妻　洋子（ようこ）

長男　橘平（きっぺい）　二〇〇八年召天

次男　龍介（りゅうすけ）　一九七七年生まれ

次男の妻　暢子（のぶこ）　一九八一年生まれ

孫　琥太郎（こたろう）、中2、璃子（りこ）、小6



主は生きておられる

川口 純子



福岡喜びの集いにて
左から長女怜子さん、純子さん、ベックさん、次女幸子さん

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられる。

（詩篇 139・1）

生い立ちと家族について

私は一九五〇年、長崎県五島で生まれました。両親と弟二人の五人家族で、中学二年生まで五島で過ごし、その後、小学校の教員だった父の転勤で長崎市内に転居しました。

小さい頃から内気で人見知りで、愛情に飢えていた私でした。母から「あなたはりんご箱に入れられ海に流されて来たのよ。うちの子じゃない、長女の喜久子が死ななかったらあなたは生まれてこなかった」などと言われ、どうして傷つくようなことを言うのか理解できず、心が引き裂かれる思いに苦しみました。

私の両足首にはゴムがくい込んだ傷跡が今も残っています。育児に慣れない事からだったのでしょう。なかなか泣き止まないので裸にして調べて原因がわかった

そうです。そんな母も九十四歳になりました。とても元気です。現在施設で楽しく生活しています。

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな、それはただ悪への道だ。（詩篇　37・8）

父は一九七二年、四十七歳でこの世を後にしました。父が血尿が出ていることを、母は知っていたそうですが、なぜかすぐには私に教えてくれませんでした。しばらくたって私も気づき、ただごとではないと思い、急遽、父を説得し仕事を休んで二人で病院に行きました。

しかし既に肝臓がんの末期でした。入院したのはわずか二十二日間でした。子煩悩で生徒からも慕われ、花が大好きで学校の花壇や、お墓に行く道の両側に亡くなった人を喜ばせたいとたくさんの花を植えていたのを覚えています。

その後、私は一九七九年に結婚し、娘二人が与えられましたが、次女が生まれてすぐに主人と別居することになり、実家に戻ることを周りからすすめられて、母との同居生活が始まりました。別居から一年を経た裁判の後、離婚が成立し、子供の親権を得ることができました。

信仰の導き

子供が小学校低学年の頃でした。母や伯母と私との間では子育てや価値観に相違があり、また子供たちから父親を引き離してしまったという負い目などで悩んでいました。

そんな時、長崎出身のあるクリスチャンの方から「ドイツ喜びの集い」や吉祥寺キリスト集会の話しを聞かせていただきました。彼女はとても平安で喜びに満ちていました。まもなくして宮崎県綾での「喜びの集い」に娘たちと参加させていただくことになりました。会場には、集会の皆さんの喜びに満ちた笑顔があふれ、平安で心地良かったことがとても印象に残っています。またベック宣教師の話を聞く事もでき、今でも温かくて大きな力強い手を思い出します。明日にでも洗礼を受けたい気持ちでしたが、実際に洗礼を受けたのは一九九〇年秋の軽井沢の「喜びの集い」でした。

御代田の福音センターはまだなく、その建設の基礎工事が始まった頃でした。東京から吉祥寺キリスト集会の婦人方の車に同乗させていただきました。紅葉を堪能しながら、子供のようにはしゃいで「あそこの紅葉、綺麗じゃない。セーターにしたら最高じゃない」と主に感謝しつつ、楽しい道中でした。

この「喜びの集い」では洗礼式の予定はないと聞いていましたが、二日目（土曜日）の夕食後、庭に出て皆さんとくつろいでいると、ベックさんが来られて「純子、明日洗礼式だよ」と言われ驚きました。嬉しくて夢のようでした。同じ境遇の婦人三人と洗礼を受けることになり本当に感謝でした。

洗礼式で贈られたみことばです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

洗礼式の後、記念写真を撮っていると、ある方が赤く染まった紅葉の枝をプレゼントしてくださいました。今も心に残る素敵なプレゼントです。主よ、ありがとうございます。

家族の救いを集会の多くの皆さまに祈っていただいています。私が救われてすぐの頃、東京の吉祥寺キリスト集会の祈り会で「あなたは別れたご主人のために祈れますか？」と尋ねられました。「祈れません」と正直に答えました。「川口さんが祈れる日が来ると良いね」と言われましたが、このことを後になって聖書か

6人の証し

Unser HERR lebt

ら少しずつ理解できるようになりました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ　5・16〜18）

娘たちは中学生の頃まで「喜びの集い」に参加していましたが、徐々に足が遠のくようになりました。日々子育てにどう取り組めば良いのか悩んでいた頃は、ベックさんの「子供の教育について」やルツ記からのメッセージ・テープをよく聞いていました。妥協せず親の役割をはたすこと、親の権威について、という内容だったと思います。

悩みや迷いがきっかけとなり、聖書のみことばによって、親として生きる道、新しい価値観が見えてきました。

長崎・佐世保キリスト集会

信仰を持ち始めた頃、長崎市内には集会の場所がありませんでした。聖書を手にし、やみくもに創世記から黙示録まで一気に読みましたが、ほとんど理解できませんでした。

それでも東京に行く度に、各家庭集会や祈り会に参加させていただき沢山の恵みの時が与えられ幸せでいっぱいでした。福岡の家庭集会で行われていた礼拝に参加させていただいたりもしました。

一九九五年頃だったと思いますが、「大牟田ハイツ」で行われた「福岡喜びの集い」に長崎からの兄弟姉妹と共に参加することが出来ました。その集いが終わった後、現地の別所さんの自宅で急遽（きゅうきょ）ミニ集会が開かれ、「長崎、佐世保にも集会ができますように」と主に祈りがささげられました。まもなく祈りは現実となりました。長崎県大村の歳川さん宅、佐々の堀内さん宅、そして佐世保の友寄さん宅、松井さん宅が次々と集会のために開放されました。長崎市内から佐世保までは高速バスで一時間半、バスを乗り継いで約十分の道のりですが自分たちの地域で礼拝がもてることは、本当に感謝でした。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

長女から結婚するという報告を聞いた時、式を長崎集会で出来ないものだろうかと祈っていました。伝道の場がなかなかないことも祈りの課題でした。式について娘たちと話し合いをし、「何もできない私ですが、主よ、受け入れてくださいますか」と祈りました。ベックさんに思いを伝えると、司式を長崎キリスト集会のメッセージ当番になっている兄弟にお願いしてみなさい、とのことでした。早速連絡すると、兄弟は「初めての事ですが」と快く引き受けてくださいました。伴奏や聖歌隊についても、あれよあれよと言う間に整いました。福岡や大分など遠方から多くの信仰の友らを導いてくださいました。会場には美しい歌声が響きわたり、主が働いてくださっていると確信が湧いてきて、感謝でいっぱいでした。親族も「良い結婚式だったね、こんな素晴らしい結婚式は初めて」と喜んでいました。

こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

（1コリント　13・13）

次女の場合は、結婚式は一般の形式で行われましたが、結婚にあたり相手の方と一緒にベックさんとお話しする機会を与えられ感謝でした。

主はいつもわたしの側で

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・18）

私はかつて長崎県農協労組やＮＢＣ長崎放送労組で仕事をしていました。組合の事務所には一人でいることが多く、多額の会計処理や事務全般を任されており、一人で仕事をしていると、忘れていることはないか、決済は合っているか、どこか間違ってないか、という重圧が常にありました。いつも机に座るとすぐに「主よ、そばにいてお守りください」と祈る日々でした。

長崎県農協労組から、勤務二十年を前に財政困難という理由により解雇通達を受けました。当時県内七農協構想で四十余の農協が吸収合併の方向に進んでいました。脱退する組合や、組合つぶしが行われたりという状況もあったので仕方がないと思っていました。

その頃、有給休暇をとって「ドイツ喜びの集い」に参加しました。ドイツの集会の方々の揺るがない信仰、日々の祈りに巡り合うことができて感謝でした。ベックさんとお話しする機会も出来、退職の件について話すと、「辞めた後、生活は大丈夫ですか？」と聞かれました。当時は土地付きの中古家屋を購入、改築して二年たったころで、長女が短大を卒業したばかり、次女は歯科衛生専門学校に通っていましたが、私の答えは「主が養ってくださることを確信しています」でした。

わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。（イザヤ　48・17）

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

みことばの通り、主は益を与えて下さいました。退職金は思いのほか多くいただきました。五十三歳での再就職も与えられ六十六歳まで働くことができました。

六十歳の頃から母や伯母（おば）の介護がはじまりました。仕事をしながら病院や介護全般はかなりの負担でした。伯母の場合は大腿骨骨折で入院手術、病院を移ったかと思ったら、また同じ所を骨折、二度の手術とも麻酔による認知の症状が出ました。看護師さんから手に負えないと仕事中に電話があり、職場からタクシーで病院へ。なんとか落ち着き、職場に戻ります。帰宅してからも夜中に呼び出しの電話があり、再び病院へ。職場には大変迷惑をかけてしまいました。

退院後の施設を探し、介護支援に関する様々な書類を提出し、一人部屋の施設に入所できましたが、半年過ぎた頃体調を崩し緊急入院で施設退所。その上、何と母も大腿骨骨折、右手上腕の骨折、入退院を繰り返すようになりました。同じ頃次女の第三子の出産のこともあり、とうとう退職を決意しました。一年契約更新のパート採用でしたので、スムースに辞められました。主は、ずっと前からここまでのことを計画の中に入れておられたのですね。

主の憐（あわ）れみ

四十五歳前後に金縛（かなしば）りを経験しました。それ以前に、ある集会のご婦人が金縛りにあった時は、「悪霊よ、主イエス・キリストの十字架によって立ち去れ、と言うと良いそうよ」とおっしゃっていました。ある日の午後、夕飯の準備前にと横になっているといつのまにか寝てしまいました。目が覚め起きようと思いましたが手足は動かず声も出ません。「えっ、金縛り?」。思い切ってお腹の底から、「悪霊よ、主イエス・キリストの十字架によって立ち去れ！」と叫びました。すると不思議と手足が動き出し声も出ました。最初で最後の経験でした。

もう一つの経験は大変なものでした。久しぶりに従兄弟が訪ねて来て、「三万円貸してほしい」と言うのです。事情を聞くと、ギャンブルにはまり借金し今日中に返済する約束になっているとのことでした。私がお金を渡しても根本的に何も解決は出来ないと思い、彼の両親や姉に相談することをすすめました。私が一緒について行こうかと言いましたが、「大丈夫」と帰って行きました。日が暮れてから、従兄弟が帰って来ないと電話があったので事情を話しました。従兄弟は夕方になると、ほとんど視力が失われてしまいます。とうとうその日も次の日も帰って来ませんでした。捜索願いも出しました。

「主よ、私を殺人者にしないでください。従兄弟のことをお守りください。私の行動が間違っていたのでしょうか」と何度も祈りました。

三日目、山から降りて来たところを保護され家に帰って来たと連絡が入りました。死を覚悟して山に入ったようです。見つかった時は憔悴しきった様子だったそうです。母や伯母から「たった三万円、何で貸してやらなかったのか」と言われ、叔父は「あの子の運命なのだろう」と言っていました。

憐れんでくださる主が、いつも私の側にいらっしゃることに心から感謝します。

二〇二二年四月、離婚した主人が亡くなりました。

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

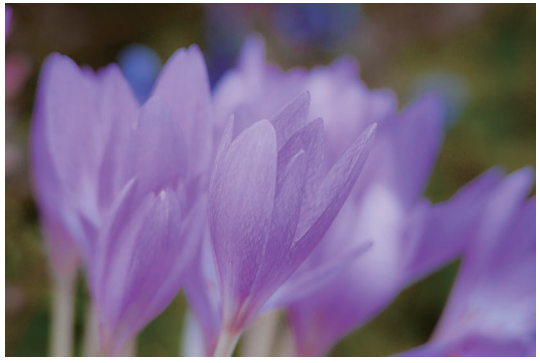
（エペソ　3・20、21）

一　静かに　神と語らう　祈りの　このひととき
　　我が内に　主は来られて　親しく　語りたもう
二　主の前に　思いすべて　注いで　祈る時に
　　御心　我が胸に満ち　安けさ　身をば浸す
三　祈れば　愛の主イエスは　必ず答えたもう
　　我が身は　主の内にあり　主もまた
　　我と共に

（「日々の歌」一四四番）

川口 純子（かわぐち じゅんこ）
一九五〇年　長崎県五島生まれ、鶴鳴女子高等学校卒業、長崎県農協労働組合、ＮＢＣ長崎放送労働組合

長女　怜子（れいこ）
夫、長女（高3）、次女（高2）
次女　幸子（さちこ）
夫、長女（小5）、長男（小3）、次女（幼稚園）
母　フジ



限りない神の愛

野間　義明



前列左が義明さん、ご家族と

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。（エペソ　1・4、5）

私は一九四七年に兵庫県揖保郡御津町（現たつの市御津町）碇岩に生まれ、現在七十四歳です。ソロモンは人生を振り返って「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。」（伝道者1・2）と述べております。私も同じように虚しい人生を送っていましたが、二十六歳の時にイエス・キリストを信じてから豊かな人生に導かれました。私の人生の中で最も素晴らしかったことはイエス・キリストとの生ける出会いであり、これからも、素晴らしいことであり続けると言うことができます。

高校三年生のある日、校門の前で、一人の男性からギデオン協会の聖書を一冊もらったのが聖書との出会いです。特に聖書には興味はありませんでした。祖母は天理教分教会の会長、父は旧制天理中学、従姉妹も弟も天理高校で学び、私も天理大学を受験しようと考えていたからです。聖書は読まれることなく、書棚の中に眠っておりましたが、捨てられることもなく、私とともに移動しました。

不思議なことに神様は私を岡山大学に導かれました。大学二年生の頃、剣道部に所属していたのですが、顧問であった英文学の教授が夏期合宿などで禅の講話をされ、それに感銘を受けて、禅で悟りを開きたいと思っていました。ところが、やっと一つの真理を悟ったとうれしくなって聖書を見ると、イエス・キリストは自分がようやく悟ったと思った真理をすでに述べていたというようなことが何度もあり、イエス・キリストはすごい人だなと思っていました。剣道部の同級生がクリスマスに、聖公会の教会に誘ってくれました。

下宿生活で、寂しい生活をしていたので、教会でのクリスマスは今まで感じたことのない、温かさを経験したことを覚えています。また、その教会で聖書を英語で読む会などにも参加しました。当時、私には博士になりたいという目標がありました。

私は小学生の頃、東映映画の時代劇が好きで、それがきっかけで小学校六年から剣道を始め、中学、高校そして大学と剣道部に属し、主将を務めました。中学では姫路市民体育大会で個人優勝、高校では姫路市民大会三年連続団体優勝、近畿大会二年連続出場、大学では中国五大学競技大会個人優勝など、剣道では、それなりの結果を残しました。その反面、高校時代は勉学では大いに悔いが残るものとなりました。部活を引退した初夏の蒸し暑い日、これからの人生どうしたらいいのかと、もの思いにふけっていた時、「末は博士が大臣か」と大きな夢を持つことが男児としての心意気と言われていることばが思い浮かび、「そうだ。博士を

目指そう」と決意しました。「今までは、一生懸命剣道をやってきたが、これからは受験勉強に専念すれば成績もあがるだろう」という気持ちでいました。しかし、いざ、勉強に専念しても、成績は上がりません。劣等感に落ち込みつつも、「博士になるために、大学そして大学院に行くんだ。それを目標に頑張ろう」という決心が、その後の九年間の私の人生の方向を決定するものとなり、目標となりました。

そして幸いにも、岡山大学農学部農芸化学科に合格することができました。入学後、有機化学担当の教官から電子論やブドウ糖の構造式の決定方法、また、ご自身の研究の話などをお聞きし、素晴らしい学科に入れたと感謝しました。大学生活は経済的には苦しいものでしたが、同級生のおばあさんの手料理をいただいたこと、岡山出身の医学部学生で剣道部の後輩の母親が昼の弁当を毎日作ってくださったことなどを通して人の優しさ、温かさを体験することができたことは感謝でした。剣道部では、いろんな学部の先輩、同輩や後輩がいて、世界が広がりました。

三年次に学生寮に入居しましたが、その年の春、東大紛争を契機として大学紛争が岡山大学にも飛び火し、全学学生大会で授業ストライキ動議が可決し、一年間授業が行なわれなくなりました。大学構内は教官同士や学生たちがイデオロギー論争を巻き起こし、お互いが相別れて憎しみを丸出しにしての争いが起こりました。そのような中で多くの教官や同級生が大学に絶望し、大学を去ってゆき、私たち同年配の心に深い傷跡を残しました。極限に至ると人は相手を倒すまで戦う者であることを見て、人間とはもっと善なる者と思っていた私は大いにショックを受けました。その反面、個人的に教官の研究室に出入りし、研究のお手伝いや、茶道部や弓道部にも入部したりして時間を有効に使えたことは幸いでした。その大学紛争も中途半端な形で収められ、同級生は心に深い傷を受けたまま、それぞれの人生を歩むことになりました。

私は新設された岡大大学院に進学し、岡山大学附置研究所農業生物研究所で大学院生として二年間を過ごしました。最初の一年は毎日実験に精を出しましたが、まったく成果があがりませんでした。二年生になり、次の進路を考えなくてはならなくなりましたが、修士課程を修了できるのだろうかという不安と将来の進路のことで私は悩んでしまいました。私の心は不安な思いで一杯になり、私に期待している両親のことを思うと、夜になると精神的にくたくたに疲れてしまいました。

そのような惨(みじ)めな生活をしている時、本棚の中のギデオン聖書が目に留まり、はじめて真剣に読むようになりました。毎晩、むさぼるように福音書のマタイ、マルコ、ルカと順番に読みました。読み進むうち、何故か、心が静まり、平安な気持ちになりました。かつて映画の中で見たクリスチャンが左手を胸にあて、右手で十字を切っていたのを思い出し、十字を切って、「アーメン」と言って眠りについていました。そのような時、指導教授の計らいで大阪府立大学大学院博士課程の受験の道が開かれ、受験し、予約奨学生として、入学が決まりました。

大阪は私の心を躍動させ、気分も新たに、頑張って「博士になろう」という気持ちにさせてくれました。大阪府立大学では大学院生が多く学び、夜遅くまで明かりがついており、卒論発表会や講演会など活発で学究的な雰囲気に満ちていました。私は新しいテーマをいただき、朝早くから夜遅くまで研究に没頭しました。また気分転換に府大剣道部で稽古(けいこ)をしたり、院生仲間と飲み会をしていました。

一年ほどして、私は学生寮に入寮することにしました。入寮初日に、同室のクリスチャンを訪ねて日本キャンパス・クルセードという学生伝道団体のスタッフが訪ねて来られ、話しているなかで、ご自分が、いか

6人の証し

Unser HERR lebt

にしてクリスチャンに導かれたかを話してくださり、帰り際に「人生を豊かにする四つの法則」という小冊子を置いていかれました。将来に対する不安もあったので、興味をもって読みました。そこには次のことが書いてありました。

自然の世界にはいろいろな法則があるように、神と人との間にも次のような法則があります。

第一法則は「神がおられ、あなたを愛しておられ、あなたの人生をすばらしいものにしようとしておられます。」ということでした。本当に神様が私さえも愛し、私の人生をすばらしいものにしようとしておられるなら、そのようなすばらしい人生を歩みたいと思いました。何故、私はこのすばらしい人生を自分のものとしていないのだろうか。

次いで第二法則では「人が神の愛と計画とを知ることも、体験することもできないのは、罪によって神との交わりが断たれているからです」と書いてありました。私は良心に照らして自らを省みた時、はっきりと罪がわかりました。罪とは神への反発と無関心であり「愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。」（詩篇14・1）、人の正しくない行いです。「人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな内側から出て、人を汚すのです。」（マルコ7・21～23）。聖書は、意識的な反抗であっても、消極的な無関心であっても、すべて神の命令に逆らうことをさして罪と言っているのです。私は自分が神の前に罪人であると認めざるをえませんでした。そして私が罪を持っているがゆえに、神が与えようとされている素晴らしい人生を自分のものとすることなく、寂しい、心からの喜びのない日々を送っていると理解できました。私のうちにある罪が神と私との関係を断絶させていたのです。いったい、この罪はどのようにして解決されるのだろうか。道徳的な生活、善行や真剣な努力、金や宗教は決して罪を潔め、豊かな人生をもたらさないことがわかりました。

次いで第三法則で「イエス・キリストだけが、人の罪を解決することができます。人はイエス・キリストによって、神の愛と計画とを知ることができます。」と書いてありました。キリストが私たちの身代わりとして死なれたことや「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。…そして、自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。…キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたはいやされたのです。」（1ペテロ2・22、24）、キリストが復活されたこと「キリストは…私たちの罪のために死なれ…、また葬られ…三日目によみがえられ…ケパに現われ、それから十二弟子に現われた…。」（1コリント15・3～5）によって神は人の罪を赦し、人との交わりを回復する道を備えてくださいました。具体的にイエス・キリストだけが私の罪を解決することができるお方であることを知りました。

そして第四法則で私はイエス・キリストを罪からの救い主、人生の主として受け入れる必要のあること、その時、神の愛と計画を本当に知ることができることを示された時、キリストを受け入れる決心をしました。キリストの招きに応じて、一人、部屋の中で声を出して、「神さま、私はキリストを必要としています。私は神様のまえに罪人です。どうかわたしの罪をお赦しください。今、私は心の戸を開いて、イエス・キリストを私の罪からの救い主、また人生の主としてお迎えいたします。私の心の王座を占めてくださり、神様の望まれるような者にしてください。アーメン」と祈りました。

しかし、聖書知識に乏しかったこと、学位論文作成の重圧、卒業とその後の就職などの思い煩いなどで不信仰になり、神様や聖書に対して深く信頼することができなくなりました。そのような時、日本キャンパス・クルセード主催の春のバイブルキャンプが浜名湖ユー

スホステルで開催され、参加する機会を得ました。そこでは百五十人近い若い大学生が全国から参加しており、皆、喜びに満ち溢れ、瞳を輝かせて主イエスを賛美しているように見えました。しかし日が経つにつれ、私はそのような雰囲気になじめなくなり、居心地の悪さを感じて沈んでゆきました。キャンプの三日目になって夜の集会の始まる少し前、私はキャンプ場を抜け出し、山道を歩いて松林のところに来ました。「身の置き場のないこのようなキャンプには居たくない。大阪に帰ろうか」とも考えました。しかし、大阪に帰っても今までの延長線上の生活が待っているだけです。もうそのような生活は絶対に嫌でした。そのようなわけで、松林のなかで、月明かりに照らされて青く澄んだ空に向かって、「神様、このようなみじめな私を救ってください。私は本当にクリスチャンになりたいのです。もし、私がクリスチャンになれないのなら、このような私を殺してしまってください」と叫び祈りました。空を打つような叫びでした。その後、トボトボと夜の集会場に帰って行きました。その時の私の心は反抗的で、ともに賛美をすることも拒み、メッセージ「神の愛」も聞くまいと固く決心をして、ふてくされて座っていました。しかし、不思議なことに聞くまいと思っていたメッセージが心に入り、過去の自分の罪深い生活が私の瞳に映し出され、このような罪深い者をも滅ぼさずに今まで愛して導いてくださった神様がおられるということがよくわかりました。牧師の招きに応じて、前に出て行き祈っていただきました。涙がとめどもなく流れてきました。それとともに何か肩の荷が下りたような安堵感を覚えました。次の日、四日目の昼に、体育館に全員が集まり輪になって座り、証しの時が持たれました。司会者からキャンプでの感想を尋ねられ、二番目に私にマイクが差し出されました。何をしゃべっていいかも考えることなくマイクをとって立ち上がりました。そして、昨晩、神様が私に起こしてくださったことを話し始めようとした途端、声がつまり、涙がこみ上げ、涙が頬を伝わりました。誰かにやさしく包まれたような感覚でした。そして「このキャンプに導かれたことを神様に感謝します」と言い、座ってからも涙は流れ続けました。不思議と何ら恥ずかしいと思うことなく、かつて読んだ数少ない聖書のみことばが思い浮かびました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ　2・8〜9）

神様は多くの人々の見ている前で、この頑なで高慢な私に強力な愛の力をもって救いの確信を与えてくださいました。帰阪のため、小雨の中、浜松駅に向かう途中、沈丁花の花の香りが漂ってきました。それ以来、春が来、沈丁花の香りが匂うたびに初めの愛を思い起こします。また、それまでの暗い景色が、総天然色に輝いて見えたことは、その後も今に至るまで変わることはありません。

帰阪後も、主にある平安と喜びは続き、四月初めの農芸化学会大会の発表も無事に終えることができました。私は神様の憐れみによって救い出され、溢れる喜びと感謝の生活に入れられました。主イエスを信じてからの生活はすべてが新鮮で、生活に張りがあり、何をしても感謝と喜びを持ってすることができました。毎日、神様に対する信頼と期待感があり、心の中から湧き出る喜びを止めておくことができず、いつも神様を賛美していました。不思議なことですが、目からうろこがとれたように神様が愛をもって造られたこの自然界が輝いて見えました。生きていること、いや生かされていることの素晴らしさ、喜びをこの時ほどうれしく感じたことはありません。剣道も激しい稽古や極度

6人の証し

Unser HERR lebt

の緊張感を伴う試合も主イエスにあって力むことなく、平常心をもってすることができるようになりました。研究も楽しくなり、学会での一人旅でも主の臨在により、感謝と幸福感で一杯でした。どうしてイエス様を信じたら、このように祝福に満たされるのかよく解りませんでした。その時の心境は「この喜びをだれかにあげたい」でした。私はいろんな人にイエス様のことを話しました。喜びに押し出されて話さざるを得ない状況でした。日本キャンパス・クルセードのスタッフの方は「今与えられている神様の祝福は、今まであなたが苦しんで来られたので、それに対する神様の恵みです。今はその恵みを十二分に受けておられるといいですよ」と言われました。この喜びに満ちた幸いな時は、その後、神様が私になそうとされていた辛い訓練を受ける上で幸いでありました。研究室での学位論文作成、院生会の委員長、府大聖書研究会、札幌五輪の銅メダリスト、ジャネット・リンを迎えての学内伝道集会や学生寮での伝道集会の下働きをしていました。また、西初芝キリスト教会に導かれ、バプテスマ・クラスを経て、一年後の三月に受洗に導かれました。水から上がったときに、聖霊が鳩のようにイエス様に降りて来られたように、私も感じた不思議な一瞬でありました。

神様はいつも私を愛し、義の道に導いてくださいました。博士課程も無事修了し、学位論文も仕上げることができました。卒業後、大阪女子学園短期大学での話が来て就職することになりました。その年の夏に能勢川キリスト教会員の鴻野行子さんを紹介され、翌年、西初芝キリスト教会で結婚へと導かれました。

ギデオン聖書をいただいてから実に九年目、二十六歳の時に、聖書が言っている永遠のいのちを受ける恵みにあずかったのは、本当に感謝でありました。

その時から、今日までの約四十七年間、すなわち、大阪での十三年間、徳島での二十五年間の教員生活、そして定年後の十年間の信仰生活には、この紙面では語り尽くすことのできない多くの喜びとともに多くの試練（訓練）がありました。特に、クリスチャンとしてどのような生き方をすべきかとの戸惑い、与えられた職場での研究と教育、信仰者である妻との結婚生活、主からゆだねられた四人の子どもたちを育てる上での数々の事がら、祖母、両親、肉親、親族や知人への伝道、開拓伝道、海外伝道、教会生活における多くの問題、経済的な問題など数えきれない事がらの中、主はいつも近くにいてくださり、一歩一歩導いてくださったことは感謝にたえません。その間にベックさんとの出会い、キリスト集会の皆さんとの主にある交わりをとおして、霊的に大いに養われたことは、信仰生活をする上で、大きな幸せであり、財産でした。主はいつも「あなたは、わたしに従いなさい。」（ヨハネ21・22）と声をかけてくださり、その都度与えられた聖書のみことばに支えられ、いかなるときも主を忘れたことはありません。「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。」（詩篇23・1）というみことばは、私自身の告白となっています。

6人の証し

Unser HERR lebt

野間 義明（のま よしあき）
姫路市立余部幼稚園、余部小学校、姫路市立朝日中学校、兵庫県立姫路東高等学校、岡山大学農学部、同大学院、大阪府立大学大学院（農学博士）、大阪女子学園短期大学、徳島文理大学

妻　行子（ゆきこ）
長女　こずえ
次女　橋本 友美（はしもと ともみ）、
忍（しのぶ、夫）、京（けい、孫）
長男　臨太郎（りんたろう）、
真理子（まりこ、長男の妻）
三女　愛（あい）

主の御恩寵にあずかって

野間 行子



左から、お姉様の一木弘子さん、行子さん、お母様の鴻野久美子さん

生い立ち

私は、両親（鴻野 弘、久美子）のもと、一九四八年に四人兄弟姉妹の末っ子として徳島で生を受けました。

私が小学校四年生の時、母の勧めでピアノを習うようになりました。習熟が早く、両親はピアノを買ってくれました。私が高校生の頃、長兄がホロヴィッツの演奏曲集のレコードを買ってくれました。その繊細なメロディやダイナミックな表現に、すっかり魅了されて、毎日聴き入るようになりました。そうこうしているうちに、ピアノを専門的に学びたいと思うようになり、大阪音大短期部のピアノ専攻科に入学しました。入学後、ピアノ演奏のテクニックが、自分の望んでいるレベルには達していないことに気付かされました。ピアノの指導教官が投げかける言葉にも傷つくようになってゆきました。しかし、ピアノをあきらめきれない私は、卒業後、音楽教室の講師や家でピアノ教師をしつつも、技術の向上を目指して、かなりの練習に打ち込みました。ある程度の上達はありましたが、幼少期に培うべきであったテクニックに関しては、取り返しがつかないこと等があり、結局は失望するしかありませんでした。

その頃より、自分に自信が持てなくなっていったように思います。そして、おのずと、自分の内面を見つめ始めていました。そして気付いたのは、自分が自己中心で、思いやりや愛のない者であるということでした。人に認められたい、愛されたい、信頼されたいという思いが強い者であることも認めざるをえませんでした。年齢的に言えば、結婚適齢期になっていましたが、どういう方と結婚すべきなのかも、全くわかりませんでした。心の内は、虚しさに支配されるようになっていました。

イエス様との出会い

私の内面のみじめさをイエス様はご存知で、憐れんでくださり、すばらしい計画を立てていてくださったのです。華道の先生をしておられた友人が、ある時、日本メノナイトブレザレン教団の教会の青年バイブルキャンプに誘ってくださったのです。キャンプに参加した初日に、私は、今までに経験したことのない圧倒されるような平安に満たされたのです。それは突然の経験でした。そのことは、あまりにも大切で、友人にも打ち明けずにいましたが、心秘かに思ったことは「この平安が、イエス・キリストから来たものであるなら、私は信じよう」ということでした。そうして、キャンプの最終日を迎えました。その日は、八月十五日で、終戦記念日でもありました。快晴の清々しい陽光を浴びながら、伝道師の先生に招かれて数人の青年たちと共に、栗林の下で、コーラを頂きながら、お話を聞くことになりました。聖書の話をしてくださった後で、次のような質問をされました。「イエス・キリストを信じますか？」。私には唐突に思われましたが、あの圧倒的な平

安に包まれたことを思い出すと、躊躇なく「ハイ！」と答えていました。「それでは、ここに書いてある祈りを読んでください」と言われましたが、素直に、また、神様に祈るのだから、真剣に祈るべきだと自分に言い聞かせて、祈り始めました。「イエス様、わたしの罪のために、十字架にかかってくださり感謝します」と。

ところが、私の罪のためにと言うか言わぬうちに、イエス様は、私が今まで悩んでいた原因が、私の罪にあったこと、そして、その罪は、私の自己中心と虚栄心にあったことをはっきりと示してくださったのです。私の心は一瞬のうちに明るくなり軽くなりました。涙が溢れ流れました。そして、周りの自然の木々も、生き生きと目に映るようになり、この自然も、人を愛して、神様が創造なさったのだと思えたのです。私の救いを目の当たりにした青年たちは、驚いて喜んでくださいました。そして、皆で祈っていたのだと話してくださいました。私が二十四歳の時でした。

キャンプから帰ってみますと、私はピアノの重圧からすっかり解放されていました。あるがままの自分を受け入れるようになっていました。また、後には、教会での奏楽のご奉仕を頼まれるようになり、その時、ピアノをやっていたのは、このためであったのだと悟るようになりました。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない栄えに満ちた喜びにおどっています。これは信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。（1ペテロ　1・8、9）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（2コリント　5・17）

家族の救い

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

私の生活は一変しました。テレビも全く興味が無くなり、午前中は二時間ほど、聖書を読み、祈ることが日課となりました。そして、家族の伝道に心が燃やされるようになっていきました。

母は、私の信仰に反対していました。また、神様の存在にも、全く無関心でした。私のことについては結婚のことを第一に考えるべきだと思い、次々と見合いの話を持って来ました。私は結婚するなら信仰者の方、と願って祈り始めていました。母とは、日々顔を合わせては、話し込んでいたと思います。

その当時、私の最も信頼していた長兄が、交通事故で亡くなり、すでに四年の歳月が過ぎていました。母は長兄を尊び、頼りにしていましたので、その悲しみは何ものによっても癒されることはないと思っていました。しかし、イエス様は、働いてくださっていました。「仏壇の前で、心が癒されるどころか虚しさが増すばかりだ」と母は言うようになりました。偶像礼拝の虚しさを、身をもって体験したようです。そして、私の受洗の時には、親としての責任上、立ち会うと言っていましたが、その当日、聖霊によって、深い感銘を受け、その後、教会での聖書研究会にも素直に集うようになり、私に遅れること一年で、受洗の恵みにもあずかりました。

父は、キャンプから帰って来た私が、すっかり変わったので、喜んでくれていました。「小生意気な娘が、素直になり、顔つきまで変わった」と信仰を認めてくれていました。しかし、父は自分は善人であるとの自負心や、俳句をたしなみ、尺八を奏でる風流人でもあり、また、読書好きで雑学の士でもありましたので、信

仰や宗教には無関心でした。しかし、私はイエス様にあって、罪について熱心に伝えるように示され、父と話し合うようになりました。初めのうちは、罪があると言うと、不快感を表して怒ってしまうこともありましたが、後日、「罪がわかってきたなあ…」と言ってくれるように導かれていました。母に遅れること一年で信仰を告白し、受洗の恵みにもあずかりました。そして、仏壇も教会で焼却していただくことになりました。主は勝利してくださったのです。

母と私は、私の五歳年上の姉の救いを祈り始めました。すると間もなくして、姉は関東におりましたが、夫の転勤で、私たちが住んでいた町の隣りのベッドタウンに移って来たのです。当然のことながら、福音を伝え易くなりました。しかし、義兄の反対や、姉もその当時は、長女の出産の時に逆子で、へその緒が身体に巻き付いてチアノーゼの症状が起きたことで、将来娘に障害が起こるのではないかと心配しておりました。また、そのために義兄とも不仲な状態になっていました。しかし、姉はその後に、自分の思い煩いが原因であったと気づくようになりました。そして、罪を認めて、イエス様の贖いの御業を信じるようになり、受洗の恵みにあずかり、信仰の歩みを続けています。

三歳違いの兄は軽い障害がありました。しかし、当時集っていた教会の方々の熱い祈りとおつき合いを通して、心が開かれつつありました。受洗の前に、全てのことを感謝して歩まれ、祝福を豊かに経験しておられる方々の証しを読むように薦めたところ、それを読んで、「私も人生を感謝して歩みたい」との悔い改めが与えられ、はっきりと信仰を告白し、救われました。そして、障害がある人との結婚を祈っておられた信仰者の方に出会い、結婚に導かれ、三人の子供にも恵まれたのです。主の御恩寵は、私たちが思う以上のことを実現してくださいました。主の御名を褒め讃えました。

主に信頼する者には、恵みがその人を取り囲む。
（詩篇　32・10）

結婚

イエス様は、私の個人的な祈りにも答えてくださり、信者である主人と出会い結婚いたしました。結婚後、堺市で長女と次女が与えられ、三重県名張市で長男と三女が与えられました。そして、長女出産の折には、生きておられる主のみことばの強い力を体験しました。それは、出産の直前に体験したことでした。月が満ちて陣痛が始まり、入院しましたが、その後、出産前なのに、陣痛が止まってしまいました。力尽きたように思われ、不安と恐れで気力が失せてしまったように思いました。その時でした。「いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る」（詩篇91・1）というみことばが心の内に聞こえてきたのです。力強いみことばでした。全能者である主がともにおられることを思い出し、急に力が湧いてきました。そして、お産が急速に進み、無事に長女を出産できたのです。後日、改めて、その詩篇を読んだところ、忘れられない励ましと平安をいただいたものでした。主イエス様は時々、このように御自身の生きておられることを、みことばをもって現してくださり、弱い私たちを助けてくださるお方であることを証ししてくださいました。

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送ったことを成功させる。
（イザヤ　55・11）

私たちは名張市から兵庫県川西市に、さらに、半年もせずに主人の仕事の関係で、徳島に転居することになりました。私も、徳島に来てからは、教会に集い、子ども四人の世話とともにピアノ教室で、忙しい日々を

送っておりました。いつしか主にある初めの愛から離れ、教会の中の問題に目が向くようになり、悩むようになっていました。そのような時、徳島キリスト集会の方と出会うように導かれたのです。その方から、ベックさんのメッセージのテープを頂きました。イエス様のことしか語られない内容に、主からの平安と喜びに満たされていき、集会に参加することが主のお導きと感じるようになりました。その後、初めて参加した年末年始の御代田の「喜びの集い」で、ベックさんにお会いした折に、教会での悩みを打ち明けますと、「良くわかります」と言ってくださり、長年の重荷を下ろしたような気がしました。徳島に来てから、長女と次女は中学生の時に、長男と三女は小学生のときに受洗の恵みにあずかりました。また、徳島県在住の祖母も救われ、「徳島喜びの集い」でベックさんから洗礼の恵みにあずかりました。祖母の葬儀もベックさんが来てくださいました。また、兵庫県御津町（現たつの市）に住んでいた義父も、大腸ガンに倒れ、その後、肺や脳に転移しましたが、そのような中で主人が福音を伝えました。そして、当時集っていた教会の牧師さんの導きで、はっきりとイエス様を受け入れ、義父の住んでいた相生福音教会の牧師と牧師夫人と主人の立ち会いのもと、御津病院にて受洗の恵みにあずかりました。義母も脳梗塞で倒れ、主人の祈りと詩篇119篇のみことばに涙を流しました。私たちは義母も救われたと確信をいただきました。

恵みの時、主からのお答え

この恵みの中に、しっかりと立っていなさい。
（1ペテロ　5・12）

近年いただいた恵みは、聖書通読によって与えられました。一日に旧約聖書四ページ、新約聖書四ページを読めば、一年間で、旧約を一回、新約を三回通して読むことが出来ることがわかり、ここ数年実践して読んでいます。そして、全体を何度が読んでいるうちに旧約からは、「主への恐れをもって信頼して従うこと」を、新約からは「主が願っておられることは、イエス様の十字架を見上げて、私たちは互いに赦し合い、受け入れ合い、愛し合って一つになって主のみからだを建て上げていくことだ」と示されました。主の十字架が虚しくなるような歩みにそれて行ってはならないということです。また、私の心の奥底に潜んでいた「高ぶり」に光をあてられたことです。人前で、どのように敬虔に振る舞うことがあっても、心の奥深くに潜んでいるものを、主は見過ごしておられませんでした。主の前に心を注ぎ出して祈っている時に、「高ぶり」に気付かせていただいて、そのことで悔い改めの祈りをした時、密かに築いていた私の心の城壁が崩れ去ったように思いました。それから後、周りの方々との関係がとても楽になり、主の愛に包まれているように思われるのです。イエス様が中心にいてくださると思えるのです。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。
（ガラテヤ　6・14）

さらに、アンドリュー・マーレーの著書『謙遜』（いのちのことば社）に、主によって導かれました。この本の中で、謙遜こそ私たちイエス様を信じ、主に自らをささげて歩むことを願っている者が、追い求めるべきものであるということが書かれていました。私たちが本気になって、謙遜という徳を求め始めると、分裂、分派、また、信者同士の間のさばき合い、争い、意見の不一致等々、主の十字架のもとに、消え去り、主のいのちだけが、主の栄光だけが、輝いてくださると、示してくださっているのです。

イエス様は私の内なる人を初めの愛で満たしてくださいますことを日々感謝ししつつ、歩みたいと思います。

御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。（黙示録　22・17）

野間 行子（のま ゆきこ）
西宮市立高校卒、大阪音楽大学短期大学部ピアノ専攻卒、ヤマハ音楽教室講師、家庭にてピアノ教師

夫　義明（よしあき）
長女　こずえ
次女　橋本 友美（はしもと ともみ）、忍（しのぶ、夫）、京（けい、孫）
長男　臨太郎（りんたろう）、真理子（まりこ、長男の妻）
三女　愛（あい）



イエス様は道であり、真理であり、いのちなのです

増森 孝



前列左、奥様の恭子さんとお母様の増森すみさんと

私は一九四九年に増森家の長男として、宮城県仙台市に生まれました。祖父母、父母、弟の六人家族でした。祖父はスミレやチューリップなど草花を造って花市場に卸す農園業を営んでいました。母の兄が戦争で亡くなり四女であった母すみは、家を継ぐことになり戦争から帰ったばかりの従兄の礼三と、祖父母に言われるままに、いやいや二十歳で結婚しました。

そんな中、男の子が生まれたので、家族は大変に喜んだそうです。祖父は大変熱心な仏教徒で、お寺の檀家のお世話役もしており、六女のうちの五人までが、お寺が関連する学校に入学させられました。母も嫌でしたが、従ったようです。

私の通った幼稚園はその関連ではなく、遠かったのにカトリック系でした。母は教育熱心で、子供に夢を託していた様です。この幼稚園で地獄の話を聞き、とても怖かったことを覚えています。それからは怖くて一人では寝られず、母に添い寝をしてもらう弱虫でし

た。二歳年下の弟は平気で寝ていました。近所で葬儀があると、「おじいちゃん、おばあちゃんもいつかは死ぬのだなあ」と思っていました。

近くに住む母の二番目の姉は、叔父にさそわれ、プロテスタントの教会に通っておりましたが、旦那を家に残して出かけることを、私の父、母ともに非難していました。小学校に入り、弟と二人で、叔母の教会に何故か通っていました。もちろん何を聞いたか全く覚えておりません。家では必要なものは何でも買ってもらえましたが、お行儀が悪いからと、買い食いはダメな家庭でした。祖父の財布から小銭を失敬して、弟と教会の帰りに、アイスキャンデーなど、買い食いをするために行っていた様なものでした。近くに祖母の兄弟も住んでおり、家族そろってクリスチャンでした。

地元の男子高に入学してからは、友だちと女子高の文化祭の、クリスチャンサークルに行っては議論をするなど、意識的にキリスト教を嫌っていました。そのような者なのに、大学はミッション系の学校に進学してしまいました。

東北学院大学は、日本初のプロテスタント教会を組織したといわれる押川方義がドイツの宣教師ホーイらと、私塾「仙台神学校」として、一八八六年に設立したものです。一年間は礼拝の義務があり、出席した証拠となる名前を書いただけで、裏口からそっと消えていました。まともに出席したことは一度もありませんでした。キリスト教学は必須科目で、何故か百点を取りました。高校、大学在学中で、百点を取れたのはこれだけです。せっかくイエス様に招かれていたのに、応じることはありませんでした。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ　59・1、2）

しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。（1コリント　1・27〜29）

大学を卒業後、仙台が本社の民間放送局に就職し、そこで家内の恭子と知り合い、一九七六年に結婚しました。子供は女の子が二人与えられました。

東京での生活

一九八三年東京支社勤務となり、神奈川県の百合ケ丘の社宅に入り、東銀座まで通勤しました。夜は会社の人との飲み会や接待で遅くまで飲んでいました。子供は妻に任せることが多く、ドライブなど家庭サービスもしましたが、充分ではありませんでした。自己顕示欲が強く出世を気にする者でした。朝早く、会社に行く前に、上司に褒められたい一心で、大手広告代理店に朝駆けし、同僚を抜け駆けするような者でした。競争と自己存在の希薄さに翻弄されていました。いばらとあざみが生えた社会で生きて行くのは楽なものではなく、多くの人が経験しているように不安だらけの東京生活でした。

あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。

（創世記　3・17）

なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父

すなわち神が認証されたからです。（ヨハネ　6・27）

妻の信仰

私が大のキリスト教嫌いであることを妻は知っていましたが、教会に行きたいと言いだしました。

当然のように反対しました。教会に行くなら離婚するくらいのことを言ったかもしれません。妻が「エホバの証人」に誘われたのはそんな時でした。神奈川県で「エホバの証人」が活発に個別訪問をしていました。「エホバの証人」は異端だ、ということもわかりませんでした。なんとか止めたいと思い、アンチキリストの本、汎神論の本、不可知論の本など、たくさんの本を買い求め、むさぼるように読みました。妻は「エホバの証人」は間違いであることに気が付き、すぐに離れました。

恭子の父は、退職後、腎臓を患い、透析を週に三回受けていました。治らない病ですから、何とか平安に過ごしてもらいたい、何か神様に頼らなければと、強く思っていることを知り、女房が幸せなら、キリスト教も良いのではないかと、考えが変わりました。妻はいつしか近くの、百合ヶ丘教会に行くようになりました。

わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。（ヨハネ　6・35）

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。（ヨハネ　8・12）

カトリック作家　遠藤周作

満員の通勤列車の中では、週刊誌や新聞のかわりに、遠藤周作さんの本を読みました。銀座の教文館、神田の古本屋で遠藤周作とある本はほとんど買い求めました。

「海と毒草」「沈黙」「小西行長伝」「深い河」「おバカさん」「イエスの生涯」「侍」など、カトリックの作家でしたが、少なからず影響を受けました。特に「沈黙」は、踏み絵を踏むキチジロウ、穴吊りに転んだフェレイラの姿に自分が重なりました。「侍」の支倉常長は仙台藩主の伊達政宗の命を受け、ローマにむかって旅立ちました。彼はローマ法王に謁見するためにだけ洗礼を受けます。

これらの本は知的満足を与えてくれましたが、救いの確信はなく、霊的な知識とは到底なりませんでした。

どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。（コロサイ　1・9）

再び仙台にて

六年半の東京生活を終え、妻は、友達から紹介された仙台のキリスト集会に集うようになりました。子供を連れて行きましたが、あまり遠かったので、そのうちに私が車で迎えに行くようになりました。家庭を開放して集会を開いていらしたキリスト集会の方に誘われ、また妻の呼びかけもあり、いやいやながら初めて集いました。その時メッセージをされた方は自分と同じ位の年齢でしたので安心して聞くことができました。目からうろこのようなものが落ちたように感じて、それからは毎回集うようになりました。

向きを変えて、出発せよ。（申命記　1・7）

一九九四年、仙台の釜房湖で行われた「喜びの集い」でベックさんとお会いし、家族揃って洗礼を受けました。「洗礼は証しするために受けるのです」と、ベックさんはおっしゃいました。私は、聖書の後ろに「生きる望みを持つことがすべてです。イエス様は私の最後の

望みです」と記しました。

しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。（マラキ　4・2）

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。（ヨハネ　10・11）

父の救い

父、礼三は宮城の金成生まれで、家の裏には、金成ハリスト教会があります。そこは、労働組合を初めて結成した鈴木文治が洗礼を受けた所です。

父は、東北学院大学卒業後、戦争に行き、高校の世界史の先生になりました。歴史は、His Storyといわれる様に、イエス様の歴史です。父は十字架も、十字軍も、カノッサの屈辱も、ルターも三十年戦争も、ウエストファリア条約も、イスラエル建国も事実として知っていたはずです。

すべては神のご計画通りに歴史は進んで行きます。

父は晩年、次男が赴任している長野に行ったとき、動脈瘤破裂で倒れ、緊急手術し、十か月入院となりました。その間、長野のキリスト集会の方がお見舞いに、ベックさんと共に来てくださいました。母は、父が倒れてからずっと看病していましたので、同席しましたが、歓迎はしませんでした。父は黙って目をつぶり、真剣にベックさんの話す福音を聞いていたようです。私の神は「イエス・キリストだ」と、よれよれの字で便箋に書き残します。その後、仙台に転院しましたが、二〇〇〇年の春に召されました。母のことについては、姉妹の証しに譲ります。

あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。

（マタイ　13・14）

主を知る前のすべては、イエス様がよくしてくださった、プロローグであり、主を知ってからは、すべてが、イエス様とのダイアログでした。私の人生も老年期に入り、キチジロウの言う「ハライソ」、アブラハムが求めた「さらにすぐれた故郷」、マタイの「天の御国」が一段と近くなり、これからのエピローグが楽しみとなりました。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。（ヨハネ　1・1〜2）

最後に職場の社報に掲載された退職記をそのまま書かせていただきます。

6人の証し

Unser HERR lebt

退職記「パスカルの賭け」

八月二四日、一年ぶりに背広を着て出社。十時に社長から定年退職の辞令をいただき三十六年五か月の社会人生活を終えました。在職中には各部署の大勢の人にささえられ、仕事ができたことを感謝いたしております。餞別としてマーケティング戦略局の方々より心のこもった手作りの、自分史の年表をいただきました。会社や世相の時の流れの中に自分が関わった部署や、仕事が十メートルにもおよぶ巻物に年表風に書かれてあります。その中にひとつだけ書かれていないことがありました。それは一九九四年に聖書を読み、イエス・キリストを信じたことです。自分の今までの人生の中で最も大切だと思っている事なので、ここに書かせていただきました。

東京支社時代には先輩から仕事もたくさん教えられ、また、同時に麻雀や競馬の賭け事も教えられました。東京競馬場でのスダホークという馬は一度だけ私

に大勝を与えてくれましたが、ほとんどが負け勝負でした。マージャンも勝った記憶がありません。仙台転勤とともに、ギャンブルはやめましたが、「パスカルの賭け」を知るようになりました。

「パスカルの賭け」は、神存在は理性では解けないため、コイントス（コイン投げ）のような「損失と利益の等しいリスク」があるとみなす、としたものでした。天国がある方に賭ければその通りになるので問題はない。しかし天国がないほうに賭ければ、勝ったとしても無であり、負けた場合の損失はあまりにも大きい。勝てば得るものは全てを得、失うものはなにもない。

永遠の命があるほうに賭けた方が賭けない場合よりも得るものが計りしれない。無いと賭ければ、有ることが事実だったら失うものは大きすぎ、それは無限大である。そういった内容です。神が存在する方に賭けるという判断が賢いと主張しました。

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。」

（1コリント　1・21）

史記の中に蓬莱山（ほうらいさん）と徐福（じょふく）という男の記録があるそうです。中国を統一した秦の始皇帝は強大な権力を持っていましたが、死だけは逃れようもなく、不安を持ち不老長寿を願っていました。

徐福という男は蓬莱山（永遠の命がある山と言われている）に渡って不老長寿の薬を求めてくると始皇帝に約束して、大金をもらい出かけました。徐福はそのまま帰らず、皇帝は死んでしまいました。秦の始皇帝は永遠の命を欲しかったのですが得ることができませんでした。

「神は実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

（ヨハネ　3・16）

私は営業畑の仕事がほとんどでしたが、フジテレビのニュースキャスターのニュースが大好きでした。一九八八年十月、山川キャスターは食道がんになり、病を通してイエス・キリストを信じ天に召されました。病に会った時には『死は「終り」ではない』（※）という闘病の記録を書かれました。五年後に元フジテレビの逸見政孝（いつみまさたか）さんが、スキルス性胃がんで亡くなりました。山川さんは「パスカルの賭け」を天国の方に賭けましたが、逸見さんはどうだったのでしょうか。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

（ヨハネ　11・15）

仙台放送の益々の発展と、皆様方が「パスカルの賭け」を永遠のいのちの方にかけられるようにお祈りいたします。

（※）『死は「終り」ではない―山川千秋・ガンとの闘い一八〇日』
文藝春秋社刊

増森 孝（ますもり たかし）
一九四九年八月二四日生まれ、仙台市在住
一九七二年株式会社仙台放送入社、二〇〇八年退社
妻　恭子（きょうこ）
長女　関口 淳子（せきぐち じゅんこ）
次女　中山 礼子（なかやま れいこ）

6人の証し

驚くばかりの恵みなりき

増森 恭子



ご主人の孝さんと

主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵みに富んでおられます。主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあります。

（詩篇　145・8、9）

私は結婚するまでは、宮城県松島町で、両親と十歳年上の兄と暮らしておりました。結婚してからは、仙台市の主人の実家のすぐそばに住んでいました。二年後に長女が与えられました。長女が幼稚園に行き始めたころ、主人の転勤のため、神奈川県川崎市麻生区にある社宅に住むことになりました。

見知らぬ土地で周囲に知り合いもなく、寂しくもありましたが、まだ若かったので、解放感と都会への好奇心でいっぱいだったように思います。

引っ越しの片付けも、一段落して新たな生活に慣れ始めた頃、本当に世間知らずで、無知で無防備な私の所に、各家々を熱心に訪問して来る「エホバの証人」がやって来ました。始めのうちは断っていましたが、たびたびの訪問にいつの間にか話に耳を傾けてしまいました。まったく油断と隙だらけで、偽りと暗闇の方向に、向かって行くことに気が付かずにいました。

しかし、つい話を聞いてしまっていたのは、気にかかる心配事があったからでした。その当時、私の父は腎臓病で週に三回透析を受けておりました。父の病が治らないにしても、心がいつも安らかで、穏やかになる術がないだろうかと、案じておりました。しばらくの間、「エホバの証人」の話を聞いておりましたが、主人がこのことに気がつき、「エホバの証人」は異端だという内容の本を毎日のように見つけては、買ってきてくれました。この頃、本当に夫婦の間で激しく口論を繰り返していて、夫婦の存続の危機でした。私は本当に軽薄で、愚か者としか言えない者でした。そうした中で私も物事の重大さに目覚めさせられ、「エホバの証人」から渡されていた物を捨てて、関わりを絶ちました。本当に主人には多大な心配をかけてしまい心から申し訳なく思いました。

その後、なかなか授からなかった次女が与えられ子育てに励んでおりましたが、心の奥底には何か言葉で言い表すことのできない虚しさがありました。それは父の病と、その困難の多かった人生、そして「死んで終わり」という人の儚さと虚しさを、考えずにはいられなかったからだと思います。

…私たちは自分の齢をひと息のように終わらせます。私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。

（詩篇　90・9、10）

主は大いなる憐みのゆえに、私の近くに、真理の道

を示してくださる主を信じる婦人を備えていてくださいました。この方は、社宅の隣の棟に住んでおられ、同じ県の出身で子供たちも同じ年頃でしたので、親しくさせていただきました。そのご一家は日曜日には教会に集っておられました。そして私も、教会に集うようになりました。主人は私が日曜日に教会に行っている間、子供たちをよく面倒を見ていてくれました。しばらく集っていましたが、イースターの頃、信仰に歩みたいと決心して、滴礼を受けました。主人は仕方なさそうに渋々承諾してくれました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

転勤生活が六年半過ぎた頃、再び仙台に戻ることになりました。そして主人の実家の隣に住むことになりました。しばらくの間は引っ越しの片付けや、様々の用事で忙しくしていました。しかし心の中では、いつから教会に行こうかと考えていました。主人の父や母の目を恐れて先延ばしにして、なかなか決心がつかないでおりました。

このように信仰の薄い臆病な私を、主は憐れんでくださり、教会に行けるようにしてくださいました。主人の叔母が同じ市内の教会に集っていたので、私もいっしょに行かせていただくことになりました。九か月程集いましたが、その教会に集い続けて、そのまま教会員となることをためらっておりました。私は何よりも主人の救い、家族の救いを最優先に祈り願っておりました。

そこで転勤先でお世話になった教会の友人に電話をして相談してみることにしました。その友人のお話から、お母さまがドイツ人の宣教師の方が開いている仙台キリスト集会に集っていることを知りました。今度は躊躇することなく、行くことにしました。

その当時、仙台キリスト集会は高田ご夫妻がご自宅を開放しておられました。それからは、私と子供たちと集会に集わせていただきました。そのうちに集会の帰りには主人が迎えに来てくれるようになりました。集会に集って二年程経ったころ、思い切って主人に手紙を書いて、一緒に集ってくれるように頼みました。そして唯々、主の憐みの御手によって、主人が集会に集うその日その時が実現しました。主人はこの日から休まずに家族一緒に集会に集ってくれました。

当時、毎年開かれていた「東北喜びの集い」が催された時、主人はベック宣教師から聖書の福音を聞きました。一九九四年七月の「喜びの集い」で家族そろって、ベックさんによってバプテスマにあずかりました。

家族全員で洗礼を受けたことを、帰宅後主人の両親に報告しました。主人の父には「お墓はどうするのだ」と言われ、義母は「私はキリスト教には入れないのよ」と言って、泣き崩れてしまいました。

しかし、その後、主は救いのご計画の御手を両親の上に差し伸べてくださいました。主人の父のことは主人の証しと重複しますので、母の救いのことを証しさせていただきます。

主人の父が召された後、主は救いのご計画を義母の上に成し遂げてくださいました。義母は七十代半ば頃に子宮体がんを患い子宮全摘出の手術を受けましたが、転移もなくその後の経過も良好でした。しかしこの頃から認知症の症状が出始め言動の異変を感じたので、専門の病院で検査を受けました。認知症の初期段階ということで、進行を遅らせる薬を飲むことになりました。

また更に試練が与えられました。七十九歳の四月に胆石による腹部の強い痛みを訴えたため、すぐ近くの総合病院に入院することになりました。炎症が酷かったので、症状が落ち着いた四月下旬になってようやく

6人の証し

Unser HERR lebt

腹腔鏡手術を受けることができました。ところが術後の経過が思わしくなく、急性重症膵炎となり五月初めに東北大学病院に緊急搬送され、集中治療室で治療を受けることになりました。母のベッドの周りには医療機器がいっぱい置かれ、たくさんの管につながれた母はほぼ眠った状態で、目にみえる状況は本当に辛いものでした。一日二回のわずかな面会の時間に主人とお祈りするだけでした。

それから一か月程して集中治療室から重症患者が入る病室に移されました。ところが一か月後に今度は腸に三か所穴が開いているのが検査で見つかり、腹部上に三か所、人工肛門がつけられました。その後も肺炎を併発したり、人工透析も受けるようになり、不安定な厳しい状態が続きました。

二〇〇八年の十月になり、人工肛門を一つにする手術を受けることができました。母は病院で、八十歳になっていました。

この後もかなり辛い内視鏡による検査がありましたが、よく耐えることができたと思います。そしてやっと容態が安定した頃、それまで点滴のみの栄養摂取だったのが口からの食事もいただけるようになり、リハビリも効果が現われてきて、まったく筋肉が落ちてしまった足に少しずつ筋力が回復して歩ける様になりました。高齢になって何度も手術を受け、その度に集中治療室に入り、周囲の方々からはいつ亡くなってもおかしくないと思われていたにも関わらず、驚異的な回復で一年近くの入院生活を終えて、自宅に戻ることができました。ただ一方的な主の憐みであり、大いなる主の奇しき御業を、感謝するばかりでした。

退院後のイースターの頃、義母と一緒に仙台キリスト集会に集うことが出来ました。二〇〇九年五月の「東北喜びの集い」でベックさんとお交わりをいただき、聖書の福音を聞くことができました。それからも体調の良い時には主人と三人で盛岡や札幌の集会にも

集う恵みにあずかりました。

義母が退院して、自宅に戻ってからは、主人は母のベッドの下の所に寝ることになりました。認知症でもあり、人工肛門が外れてしまった場合の処置が大変なためでした。日々の密着した生活の中で、母が朝目覚めるとすぐに主人がお祈りをして一日がスタートするようになりました。また食事の度ごと、感謝のお祈りにもいつしか、「アーメン」と言うようになっていました。今までの義母のことを思うと奇跡そのものでした。以前は非常に頑なで激しくもありましたから、これはまさしく、主の救いの御業でした。

二〇一六年十月二九日早朝に母は静かに天に召されました。葬儀は仙台と盛岡の集会の方たちのご奉仕をいただき行うことができました。主は、集まってくださった親戚の方々に福音を伝える場としてくださいました。

主人の母の介護生活を通して、たくさんのことを学びました。本当に弱り果てていた私を、主は憐れんでくださいました。見放すことも、見捨てることもない主の御愛に気づかせてくださいました。一方的な主の憐みでした。今は日々、主の御霊とみことばに生きる喜びと平安が与えられています。

私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。（詩篇　73・28）

実家の私の母のほうは、次のみことばによって主の救いにあずかりました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての

6人の証し

Unser HERR lebt

考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6〜7）

母は父が召されて一人になってから、私たちと共に集会に集うようになり、洗礼の恵みにもあずかりました。そして、二〇二一年二月三日に天の御国に召されました。

母は大正十三年生まれで、戦前、戦中、戦後の激動の時代の艱難を乗り越えて生き抜いた、本当に波乱に富んだ人生を送りました。十九歳の時満州に渡航し、仕事に就いていた父と結婚して、長男を出産しましたが、幸せな家庭生活も戦争のため、破壊されてしまいました。父は戦争のため、応召になり、その後敗戦と同時に、捕虜となり、強制労働のため、シベリアに抑留されました。

母は映画「大地の子」で描かれたと同じような状態で、言葉で言い表せないほどの悲惨な状況の中を逃げまわっていたと、その辛い体験を集会の証しの中で語っていました。満州での様々な体験を通して、人間の生きざまを見せつけられたと話していたことが、特に印象に強く残っています。このような、人生の苦難を刻まれた母の心に、聖書のみことばの光が真っ直ぐに差し込み、救いにあずかり、喜びと平安と希望の恵みを賜ることができました。今、母は天の御国で、イエス様の永遠の平安と喜びの中にいますから、心から感謝いたします。

このようにして主の救いにあずかった主人の両親や、私の両親との再会を楽しみにいたしております。長い間、救いをお祈りくださいました、主にある兄弟姉妹に心から深く感謝いたします。

まもなく来られる主の再臨を待ち望みながら、まだ救いにあずかっていない家族、親族、友人、知人の救いをお祈りしている日々です。

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。

（黙示録　22・20、21）

あたらしい朝ごとに、「驚くばかりの恵み（アメイジング・グレイス）」を主人と歌い、主をほめたたえています。

一　驚くばかりの恵みなりき
　この身の汚れを知れる我に
二　恵みは我が身の恐れを消し
　任する心を起こさせたり
三　危険をも罠をも避け得たるは
　恵みの御業と言う他なし
四　御国に着く朝、いよよ高く
　恵みの御神を称え奉らん

（聖歌二二九番）

増森 恭子（ますもり　きょうこ）
一九五四年　宮城県松島町生まれ、仙台白百合学園高等学校卒、宮城学院女子短期大学卒、㈱仙台放送入社、結婚のため退社
夫　孝（たかし）
長女　家族
次女　家族

6人の証し

詩篇　一三九篇

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。
あなたこそは私のすわるのも、立つのも知って
おられ、私の思いを遠くから読み取られます。
あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道を
ことごとく知っておられます。
ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなた
はそれをことごとく知っておられます。
あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を
私の上に置かれました。
そのような知識は私にとってあまりにも不思議、
あまりにも高くて、及びもつきません。

私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。
私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。
たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、
私がよみに床を設けても、そこにあなたは
おられます。
私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、
そこでも、あなたの御手が私を導き、
あなたの右の手が私を捕えます。
たとい私が「おお、やみよ。私をおおえ。
私の回りの光よ。夜となれ。」と言っても、
あなたにとっては、やみも暗くなく夜は昼のように
明るいのです。暗やみも光も同じことです。

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで
私を組み立てられたからです。
私は感謝します。あなたは私に、奇しいことを
なさって恐ろしいほどです。私のたましいは、
それをよく知っています。

私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、
私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。
あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物に
すべてが、書きしるされました。私のために
作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。
神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしい
ことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。
それを数えようとしても、それは砂よりも
数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、
あなたとともにいます。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。
私を調べ、私の思い煩いを知ってください。
私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、
私をとこしえの道に導いてください。
（1〜18節、23〜24節）



キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

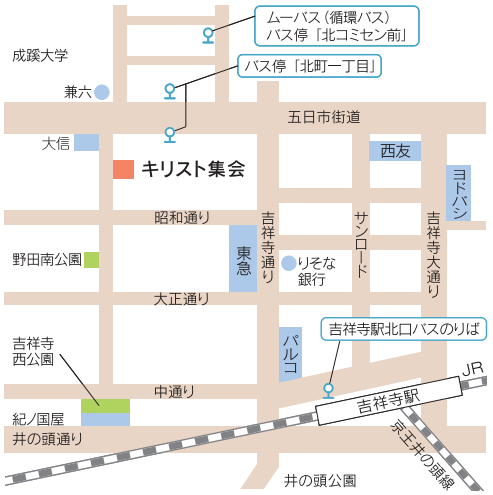
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

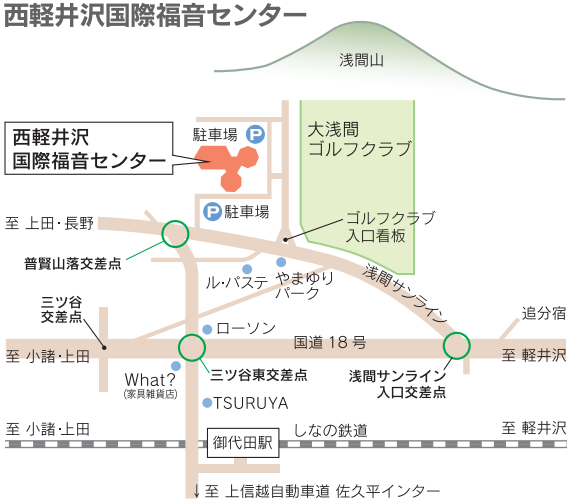
［電話］0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分（1000 円程度）
徒歩 約45分＝３Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分（約7km）

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

西軽井沢国際福音センター
［電話］ 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］ 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第60号

定価100円（税込み）2022年11月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造　黒澤錬二　鈴木力
	芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ　http://christ-shukai.net/
出版本を購入されたい方、お問い合わせ　webmaster@christ-shukai.net
また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。